
謎の転校生は・・・・・

音無 奏

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎の転校生は・・・・・

【Zマーク】

Z9829S

【作者名】

音無 奏

【あらすじ】

ある日、並盛中に転校してきた雪風麗は、なんとリボーンのしりあいだった。リボーンに“雪の守護者”になれと言われた麗。最初は心を閉ざす麗であったが、だんだん沢田綱吉ひきいるボンゴレファミリーに心を開き始める。ただ、麗には一つ誰も知らない秘密があつた。

標的〇 あらわし（前書き）

はじめまして。音無奏です。小説を書くのは初めてなので文章がおかしかったり、誤字・脱字があると思います。そのときはおしえてください！！

だれもわたしをしんじないで・・・

おねがいだから、やめじくしないで・・・

いざればあなたたち、いえ、わたとかかわったすべてのひとたちをつぶさることになる・・・

わたとかかわったことといつかいするときがくる・・・

なぜって・・・？

その理由はかんたん。なぜならわたしは・・・

呪われた子だから！――

場所は並盛。わたし雪風麗^{ゆきかぜれい}と沢田綱吉^{さわだこうきち}が出会つたときからこの物語は始まる。・・

標的〇 まへおき（後書き）

いやあー 読みにくい文章で「めんなやこ」（――）
実はわたしが受験生としてなかなか投稿できないと思います・・・
さて、いよいよ次回からツナやリボーンが出てくるわけですが、どう
うこう風に書こうか迷っています。

読んでくださった方ありがとうございました！――！ 次回もお楽し
みに（*^-^*）

標的 1 出会い（前書き）

前回は、初めての投稿で行の開け方など下手でスミマセンー(・_・)一

できるだけ読みやすいよう頑張りたいと思います！

標的1 出会い

side 沢田綱吉

「はあー」

リボーンと出会つて1週間ろくなことがないよ・・・

京子ちゃんには告白のこと冗談だと思われてるし、獄寺隼人とかつていう転校生にからまれるし・・・もうやだよ

それに、リボーンつていう変な赤ん坊がオレをマフィアのボスにするとかつていうし・・・

ボスつてなんだよ 意味わかんねえ

まあ、リボーンのおかげで京子ちゃんと友達になれたし、みんなからダメツナつていわれなくなつたからいいけど・・・

いや、よくない

とか考へてゐる「ひが」学校に着いた

獄寺「おはよーひー」れこます 10代田ーー。」

オレを説ます原因の一つ

シナ「おひ おはよーひー」

京子「おはよーひー、シナ君

朝から京子ちやんと話せやんなんてラッシュキ

シナ「おはよーひー。京子ちやん

京子「ねえ、シナ君。今日私たちのクラスに転校生がくるんだって」

シナ「えつ、そつなの。じんな子かな?」

京子「楽しみだね」

もしかしてマフィア関係か？いや、そういう情報はない

この時期に転校生か・・・めずらしいな

京子「今日私たちのクラスに転校生がくるらしいよ」

side 獄寺隼人

もじやうだとしてもオレは10代田にかけておけつかる
だけだ

それにしても10代田、笛川京子と話をしていろときはなとい
も楽しそうだ

それにしておれは・・・ 10代田のお役にたてている
んだろうか?

獄寺君相変わらず「わそつだな・・・

京子ちゃんは相変わらずかわいいな

な・・・
獄寺君は怖いけど、いつもして教室で話せる人がいるつていい

先生「みんな、席につけ」

先生の声であわてて席につく

先生「ちやおつス」

(つづ、リボーンーーー)

獄寺「リボーンさん、なんでここに・・・」

リボーン「リボーンさん、ちやつむせーな

ヒュッ

バキッ

ツナ「」つ 獄寺君」

（リボーンがチョークを投げるといんなになるの・・・）

リボーン「転校生がきたので紹介する。」い」

カツ カツ カツ

静かな足取りで教室に入ってきたその子にオレは目を奪われてしまつた

肌は雪のように白く、髪はきれいな茶髪だった

澄んだ緑色をした目は、つい見とれてしまつような魅力的なめだつた

（きれいな人だな・・・）

転校生「はじめまして。 雪風麗です」

リボーン「席はダメツナの後ろだ」

カツ カツ カツ

ごく普通の転校生、雪風麗。 その子がオレの横を通り過ぎ何か違和感を感じた。誰も寄せ付けないっていうか、とにかく周りの子とは違う感じがした。

オレはこのとき雪風麗と出会ったこととオレと後に集まるボンゴレファミリーとその関係者の運命を大きく変えたことなどに気が付きもしなかつた・・・

標的1 出会い（後書き）

やつと標的1が書けました。

私はうつのが遅いので短い文章でも時間がかかってしまいます・・・

・ゝゝゝゝ

だれか、早くうつががあれば教えてください（トロトロ）／

次回は、麗とリボーンの会話を入れてみたいと思います

お楽しみに

標的2 観察

side 獄寺隼人

なんだこの女。なんの感情も無いしゃがって。いってー何考えているのかわからんねーや

だけど、あの田は何だ？

何かを鋭く観察しているような田は・・・タダものじやねえ

この女、気を付けねえと・・・

麗「はじめまして。雪風麗です」

（あれが沢田綱吉・・・聞いていた以上に頼りなさそうだ）

リボーン「席はダメツナの後ろだぞ」

自分の席まで歩いて行くとき沢田綱吉の一瞬、なにか悟られた
ように思えたが氣のせいだろう

あいつに超直感があるとは思えない

それより、何を理由にあの人は私をここに呼んだのだろうか？

ツナ「あのつ・・・えつと・・・」

麗「何」

ツナ「えつと・・・とくじへ」

麗「それだけ？」

ツナ「・・・」

私が冷たい目で見ると沢田綱吉も氣を悪くしたのか前を向いた

休み時間などいろいろな人からの質問ばかり受けたけどすべてスルーした

嫌な人に見られたと思うけど別にそんなことはどうでもいい

それより、なぜこんなところに私を呼んだかだ

頼みたいことがあると言つて呼びだしたくせに詳しいことを話すいきなりこんな・・・

納得がいかないので私を呼んだ張本人のところに行くことにした

麗「いきなり呼び出しちゃうの?」とよ・・・ リボーン

「・・・」

リボーン「ちやおつス」

side リボーン

麗「リボーン、一体どうこいと」

部屋に入つてくるなり冷たい皿でオレをこりみつけながら言った

18

リボーン「ちやおつス」

麗「ちやおつスじゃないわよ。こいつ何を目的に私をここに呼んだのよ」

リボーン「それより、沢田綱吉さうだ」

麗（話をえてきたな・・・）

「運動・勉強すべてが最悪。周りのみんなからはあまりのダメさにダメツナと呼ばれている。家族構成は母親とリボーンとの三

人暮らし。父親は現在どこにいるのか分からず。といづれあいかし
「ひ

リボーン「よく調べたな」

麗「あんな奴がボンゴレーの代用となるのか?私はふさわしい
とは思わないけど···」

ボンゴレといつた大きな組織のボスになれるはずがない」

リボーン「それはわからぬーぞ。今からオレが立派なボスに育
てるからな」

麗「やつ。そんなことより私を呼んだ目的を教えなさいよ

やはつそこを聞いてくるのか···

麗「まかしきかなによつだな。」正直に語べきか···

リボーン「麗、おまえには『雪の守護者』になつてもいい

麗「…………今、なんていつた

リボーン「おまえに雪の守護者になつてもいい

麗「私が…………」

リボーン「ああ。そのためには10代目のボスとなる沢田綱吉のことを知つてもらう必要があつた。

だからお前を呼んだ」

麗「…………」

なるほど……。リボーンがなかなかわけを話したがらないわけだ

それにしても、私が雪の守護者に・・・

リボーンの考えていることが分からない

麗「私は嫌よ。確かにボンゴレは大きいマフィアだけれど、ボスがあんなに弱いのは例外よ。雪の守護者なんて引き受けるつもりはないわ」

リボーン「なら、今後優秀な守護者を集め、ツナを立派なボスにすれば引き受けてくれるんだな?」

麗「私が認めるよ」

リボーン「その言葉忘れるなよ」

「うして私は沢田綱吉やその守護者を觀察することになった

標的2 観察（後書き）

「J愛號あつがとひりやりこめす！－！－！－！」

受験生とこいつことで今後投稿は毎週日曜日になると思っています

遅くですみません

標的3 観察図面1（前書き）

今回も、麗中心で書いてみました。

標的3 観察日記1

1日目

今日は、理科のテストが返された。沢田綱吉（以下沢田）を見るに全然できていらないらしい
(顔が蒼いから・・・)

獄寺隼人（以下獄寺）はまだ学校に来ていない

沢田が名前を呼ばれた

先生「あくまで仮定の話だが・・・」

この根津という先生は、自分がエリートコースを歩んできたからといって点数の低い生徒をいじるらしい
沢田みたいなやつを・・・

沢田が顔を赤くしながら席に着くと、ちょうど獄寺が教室に入ってきた

獄寺「おはようございます、10代目」

根津「『ラツ、遅刻だぞ！』 今頃登校してくるとはどうこう
もりだ」

獄寺「ああ……」

根津「うう……」

獄寺はガラが悪い

これじゃマフィアといつよつやくがだらつ

でも獄寺は頭がいい。実際100点取つてたし……

休み時間沢田と獄寺が校長室に呼びだされた

15年前のタイムカプセルを見つけないと退学になるらしい

私は教室から校庭に出てきた沢田たちを観察した

獄寺はダイナマイトを使って校庭を爆破している

いくらなんでも一般の人の前でやりすぎなのでは……？

沢田のほうはリボーンに特殊弾を打たれ死ぬモードになつている

ツナ「死ぬ氣でダ・ウ・ジ・ン・グ！－！」

生徒「ダメツナ、またパンツー丁だぞ」

生徒にまたばかにされている。こういう人がボスでいいのやら・・・

ツナ「地脈発見。ここを割るうう！－！」

リボーン「肩・肘・腕の3連コンボでメガトンパンチ弾。
脊髄直撃で耐熱ヒフ弾だ」

麗「リボーン、いつのまに・・・」

リボーンはいつの間にか教室に来ていて、沢田に特殊弾を撃つて
いた

リボーンもやりすぎだと思つときが多いな・・・

ツナ「うおおおおおおお」

ドンつ

ガツ

生徒「じつ 地震？」

生徒「いつ たい何が起きてるの？」

根津「獄寺と沢田だな！…グラウンドで何をしていいか…！」

即刻退学決定・・・・

獄寺「おい、15年前のタイムカプセルは見つからなかつたが、
かわりに・・・・」

じゅやらかなり昔のタイムカプセルを見つけたらしい

その中に、根津の昔のテストが出てきて根津が焦つてている

後で聞いた話、根津は学歴詐称で解任されたらしい

もちろん、沢田と獄寺の退学処分は取り消しになつた

男子は外で野球をしている

だけど、獄寺は学校に来ていない

外では沢田をチームに入れるか入れないかもめている

あれっ・・・見覚えのある奴がいる・・・

確か山本武だ。リボーンがファミリーに入れたがってたな・・・

おっ、山本武（以下山本）が沢田をチームに入ってくれたようだ

先生「おい、雪風。この問題を解いてみる」

麗「 $X = 3$ 、 $Y = 7$ です」

先生「正解だ。では、次の問題を解いてみる」

麗「 $X = 0 \cdot 5$ 、 $Y = 2 \cdot 7$ です」

先生「うう・・・正解だ。では、この問題の答えは・・・」

ずっとこの繰り返しだった

おかげで沢田と山本の観察ができなかつた・・・

クラスにたまっていた男子に聞くと、沢田のせいでチームはぼろ負けし、沢田と山本の2人でグラウンドの整備をしているところだそうだ

今日はこれといった問題はなかつた

3回

登校してきたら教室に誰もいなかつた

リボーン「ちやおつス

麗「リボーン、みんな屋上に行つてゐるが何があつたの?」

リボーン「山本が屋上から飛び降りようとしていたの？」

麗「そうなの。それで沢田は屋上に？」

リボーン「ああ。今から俺も行くところだ」

リボーンして私たちは屋上に行つた

そこにはたくさんの生徒が集まつていて山本を止めようとしていた

対する山本は片腕を骨折していて深刻な顔をしていた・・・今にも飛び降りそうだ

リボーン「・・・・・・・」

麗「ちょっとリボーン、エリート行くのよ

リボーン「・・・・・・・」

リボーンが答えてくれないのでつこつこく」とこした

三階に降りると、ボーンはちょうど日本たちがいる下あたりに立つた

麗「山本のこと、氣に入つてゐるの?」

リボーン「まあな。殺し屋になるヤンスがあるべや」

そんな話をしていたら、屋上から悲鳴が上がつた

山本と沢田が落ちてきた。・・・なぜここに沢田と田代が合つてしまつた

リボーン「今こそ死ぬ氣になるときだぞ」

ズガニッ

ツナ「空中復活!」
リボーン

リボーン「追加弾だ」

ズガニッ

ツナ「つむじがかゆい、かゆーい」

リボーン「つむじを擊つと、つむじ育モスプリング弾だ」

麗「そんな解説はいいから」

下を見てみると沢田と山本は助かったみたいで、2人とも仲良くなったようだ

リボーンはファミリーをゲットしたと思つてゐる

たしかに山本の運動神経の良さと人望の高さはファミリーことつていいけど・・・

野球一筋つていうのがね・・・

まあ、とりあえず今日のリボーンの機嫌は良かつた

それより、沢田になんて言い訳をしようか・・・

標的3 観察日記1（後書き）

そろそろ私は職場体験といつものがあつていろいろ書いていきます

部活も大会が近く、生徒会もいろいろあって・・・

話を書くを早くしたいのですが・・・

まあ、頑張りたいと思います！！！

標的 4 疑惑

side 雪風麗

今日も学校終わったなー

沢田の観察を始めて一週間。山本はバカだけど運動ができてしかも性格がいいので男子と女子にかなり人気がある。

獄寺は女子には人気があるが相変わらず性格が悪い。というよりひどい

沢田のほうは・・・言わなくてもわかるだろ

これからどうなつていいくのだろうか?リボーンは沢田をボンゴレのボスに育て上げることができるのだろうか?

雪風麗とかつていう転校生が来てから一週間。なんかいつも見られてるって気がするんだけど・・・

気のせいかな？

それに、山本と屋上から飛び降りたときリボーンと一緒にいたような・・・

まさかマフィア関係ではないよね・・・？

でも、リボーンの隣にいたってことは・・・もうわけわかんないよ
とにかく疲れた。家に帰つて寝よう

とぼとぼ歩いているとなんとリボーンと雪風さんの2人がいた
しかも、何か話しているみたいだけど・・・
えつ・・・どうにかこうと?

散歩をしていたら下校中の麗に会つた

リボーン「あやねつス。どうだ、雪の守護者をしてみる気にはなつたか？」

オレがそう聞くと麗はあからさまにこやな顔をして呟つた

麗「守護者の山本はまだいいわ。でも獄寺と沢田は問題外。今のまじや絶対に引き受けないわ」

リボーン「そうか。でも、ツナの成長はまだまだこれからだぞ」

(やつぱりまだ引き受けてくれないか)

ツナは相変わらずやる気がないしな・・・

何かツナをやる気にしてやる出来事があればいいんだがな・・・

そんな事を思つていたらひづけツナが通りかかった

ツナも俺たちのことでつづりを見ている

リボーン「おー、ダメツナ。何ボケつとしているんだ

麗「二つの闇ヒヤヒヤヒヤ・・・」

ツナ「えつ、なんでリボーンと雪風さんが一緒にいるの?」

リボーン「それはな、麗ヒヤヒヤのじゅ」・・・

麗「あつ、こんなひが沢田さん。えつヒ、この赤ん坊と知り合いなの?」

ツナ「えつ、やつそつださど・・・」

麗「そつなんだ。なんかこの下道に迷つてゐみたいだつたから。よかつたねリボーン君」

リボーン「何言つてゐるんだ。オレはお前を雪の「あれじやあ沢田さん、あとまよひしへ」

全へ麗のやつ話を」おかしあがつて

動搖してゐるのばればれだ

ツナ「なあ、リボーン。雪風たことせビツヒツ関係なんだよ」

まあ麗が雪の守護者になることは後でツナにも言わなきゃいけないことだからな。報告は後でもいいか

リボーン「やつを麗が言つてこいた関係だぞ」

ツナ（絶対嘘だ・・・）

ダメツナのやつを言つていることがばればれだぞ。まだまだ修行が足りないな

オレはリボーンがあんなことを呟ついたけど嘘だと思つ

だつて、リボーンは雪風さんのこと麗つて呼び捨てにしていたし、それに雪風さんは最初オレが見たときはリボーンと普通に喋つていたのにオレが声をかけてから焦つていたし・・・

なんかおかしいんだよな・・・

雪風麗と沢田綱吉がかわった次の日から今後のファミリーになるべき人や沢田綱吉の支えとなる人たちが次々と現れることになるとはまだ誰も知らない・・・

標的4 疑惑（後書き）

いやあー文章短くてすみません

なかなか戦闘シーンまでいかないのですがこれからいろいろなキャラが出てくると想います

どうかあわす、じっくり覗くださー

標的5 毒サソリ・ヒヤンキ（前書き）

今日の更新遅くなつてすみません

標的5 毒サソリ・ピアソキ

side 沢田綱吉

季節は夏

ツナ「今日も暑いな。のどかわいた」

オレがそんな独り言を言つていたら・・・

チリン チリーン

(ママチャリに、「ゴーグル！？」)

なんとも不思議な人が来た

その変な人が俺の前でママチャリを停めるとヘルメットをぬいだ

(わつ・・・きれいな人・・・ハーフ・・・?)

不思議な人「よかつたらビッグぞ」

そう言つてオレに缶ジュースを投げてきた

ツナ「うへ、うわへ……」

ゴンツ パンツ

（いつて……取り損ねた。めちゃめちゃかっこわいー）

缶ジュースの中身が落ちた衝撃でこぼれてる

あれつ・・・こぼれたジュースからなんか変なけむりができてる
る・・・

ガツ

ツナ「えつ・・・」

ドサツ

（上からなんか落ちてきたー）

よく見たらカラスだつた

ていつかなんで上から落ちてきたのー？

まさか・・・この缶ジュースの中身つて・・・

ツナ「リボーン大変だー！外…ジュー…ス…鳥…が！」

リボーン「んつ？」

ツナ「んぎあああ」

オレが今までのことをリボーンのところに行くとなると
リボーンの顔にたくさんのカブトムシがくっついていた

何？樹液分泌とかしてるので…？

リボーン「子らは夏の子分たちだぞ。情報を収集してくれるんだ」

ツナ「何？虫語話せるの？」

リボーン「ビアンキがこの町に来ているんだ」

ツナ「ビアンキ…？誰だよそれ

リボーン「昔の殺し屋仲間だ」

ツナ「なんだつてーつー！」

とこうじとほまたマフィア関係者が増えるの〜！

ヒンホーン

? 「イタリアンピザです・・・」

ピザ? そんなのたのんだ覚えはないけど・・・

？「おまたせしました。あれつゞかのお皿で」
ボンバー

? 「召し上がる！」

そう言つて今朝会つた不思議な人はピザのふたを開けた

ツナ「んがつ・・・くつ苦つこ・・・」

なんだこれ・・・つまへ息ができない・・・

リボーン「ちやねつス、ピアンキ」

ピアンキ「リボーン!-!-」

何なんだよやつせの田ジユースとい、今のペザとい・・・
つーかなんでオレが殺されかけてんの〜!?

ていうかリボーン今この人のことピアンキって呼んだ!?

ピアンキ「リボーン、むかにに来たよ。また一緒に仕事しよう」

えつ、一緒に仕事・・・

リボーン「オレにはツナを育てる仕事があるから無理だ」

ピアンキ「かわいそうなリボーン。この10代目が不慮の事故か

何かで死なない限りリボーンは自由の身になれないのね」

何？それでオレを殺そつとしてたのーー？考えかたおかしいだろ
！！

「ビアンキ、とつあえず帰るね。10代田をじら・・・10代田が
死んじやつたらまたむかえに来るから」

ツナ「何言ひやがつてゐるのあんたー」

「いつたい何なんだよビアンキつていつ女は・・・

リボーンに聞けば毒サソリビアンキつていつフリーの殺し屋だつ
て言うし、その人の作る料理はすべてポイズンクッキングつていつ
毒入りの食い物になるつていうし・・・

またオレのところに変なの來たよ

ツナ「やつじえぱリボーン、あいつに氣に入られてるつぱいよな
？」

リボーン「ビアンキはオレにゾッコンだぞ。付き合つてたことも

あるしな」

ツナ「はあ！？あの女がお前の彼女だつたつてこと……？」

リボーン「オレはモテモテなんだぞ」

こんな赤ん坊がモテモテなわけないだろ

リボーン「ビアンキは愛人だ」

ツナ「おまえ、意味わかつて言つてんのか～！～！」

何言つてんだよ。愛人つて軽く言つちやつて……しかも4番目
つてなんだよ

本当にませた赤ん坊だよな……

side ピアンキ

時期ボンゴレー〇代目、沢田綱吉。はじめてあつたけどあんな奴にリボーンをとられた何て

絶対にリボーンは取り返してみせるわ

じうしたら沢田綱吉を殺せるかしら・・・

そうだわ・・・ポイズンクッキングをもつと改良してああすれば・
・

よし――それでいいひ――!

待つてて變じのリボーン

次の日・・・

side 沢田綱吉

京子「おはよー、シナ姐」

シナ「おはよー、京子ちゃん」

おなかつこひるなー

京子「今日、家庭科でおにぎりつ実習があるんだ」

ツナ「へへ」

チリン　チリーン

ビアンキ「人の恋路を邪魔するやつは毒にまみれて死んじまえ」

うわっ　またママチャリできてるよ

それより、周りのオーラかとでも黒いんだけど・・・

ビアンキ「ビーブル」

トイツ

ツナ「ダメえ！！」

ビアンキの奴また変な缶ジュースを投げてきて・・・京子ちゃん
までまさこむ氣か？

ああ、これからこんな調子で人生歩んでいかなきやいけないのか
な・・・

side リボーン

ダメツナの奴まだまだ修行が足りないな

オレがこんなに近くにいるのに気付きもしないんだからな

ちなみにビアンキはこれからダメツナが経験していくのを比べたらほんの序の口だぞ

それにしても、ほかの守護者はどうしようか・・・

side 雪風麗

今日の家庭科おにぎり実験じゃん！！

どうしよう・・・私、料理なんてできないのに・・・

早めに行って練習しようかな・・・

side 獄寺隼人

「やつこいえば、最近オレの出番がないよな？」

「10代田とあんまししゃべんないし……」

「おこ……音無、もつと出番を増やせ……」

「山本「それについてはオレも同感だな」

獄寺「野球バカは黙つてろ……」

？「まあまあ、落ち着いて」

獄寺・山本「だれだ……」

？「この小説の作者の音無です。（自分の小説に出てきていいいのかわからせんが……）今後のストーリーのことですが、なかなか獄寺と山本を出す機会はないですね。どうしてもツナや麗を中心にしてしまいます。獄寺・山本ファンの方々、申し訳ございません。しかし、これからはいろいろなキャラが出てきます」

「山本「やつこいひとなら仕方ねーな」

獄寺「セーいえばよ、転校してきた雪風つつのせこつてー何者なんだ？」

あーこの過去世じうなつてるんだよー？」

音無「セーいらへんこつては今後のストーリーに入れていくのでお楽しみ！」

それでせとよつなか」

獄寺「ううつ。雪風麗についての情報をあまり聞けなかつたぜ・・・」

・

山本「まあまあ、そんなカツカすんなよ」

獄寺「うるせー。覚えてるよ音無。ざつてーオレとー〇代田との場面をあくへしりむーーー！」

標的5 毒サソリ・ヒツシキ（後書き）

今日は弓道の審査があつてとっても疲れたら
でもなんとか間に合わせることができました

標的6 弱点（前書き）

いよいよ、私の大好きなキャラが登場します
しゃべり方などとても難しくついひつひつ迷つてました・・・

標的 6 弱点

sideリボーン

今朝、ツナと別れてから深刻そうな顔をした麗に会つた

リボーン「ちやおつス

麗「・・・・・」

リボーン「どうしたんだ？ 深刻そうな顔をして」

麗「・・・・・」

リボーン「そういうえば、京子が家庭科でおこがり実習があるみたいにな。おまえ、料理できないだろ」

麗「・・・・・」

リボーン「こつまでも無視してんじゃねーよ

麗の態度にむかついたからキックをくらわした

麗「 いた」

こつもよけの麗が直撃を受けるなんて・・・心配が困つてるな

ね、学校に忍び込もうとしているセブランキが

じつやうが見れそうだな・・・

私は正直リボーンに凶星つかれて困っている

リボーンは絶対に人の弱点をいじるからな

だからと云つて「まかしはきかないだらうからな

と考えていたのにリボーンのキックが飛んできた。反応が遅れてよけきれず直撃した

麗「いつたいな」

やつぱりには本当のことを話すべきかな・・・後からがめんどい
し・・・!!

リボーンの奴笑つてやがる!!

絶対何か変なことを思ついたな

リボーン「それじゃあな。オレは用事を思い出したんで先行くからな」

用事と云つより暇つぶしだろ

とにかく家庭課室に行つ

家庭課室にて・・・

えーと、必要なものは炊飯器にしゃもじ、皿にラップにえーと米と具材、洗剤にスポンジ、タオル！！よし、OK！！

最初は米を洗うんだよね

ざるに米を入れて洗剤を大さじ一ぐらい入れてよく洗う

あれっ？泡がたくさん出てきた。きちんと洗い流せば問題ないよね！？

炊飯器に水を入れてスイッチ。

具は何にしよう・・・ツナマヨにこんぶ、あんこにバナナでいいかな？

あつ、じはんが炊けた。炊飯器のふたを開けるとじはんと洗剤のいいにおいが・・・

よしそ、ラップにじはんをのせて具を入れて三角ににぎれば完成

！！

ガラガラ

?.「ヤハ、」云々などハウで何してゐるの?」

「ハ、」云々は風紀委員長雲雀恭弥――

雲雀「ねえ、何してゐるの?」

麗「今日お出でなつて実習するからその練習」

雲雀「僕に無断で教室を使つのは許せないよ。幽み殺していい?」

麗「お、おちつけつて。」云々暴れても物が壊れるだけだって

めんどくさいのが来たな・・・

雲雀「一瞬で終わるよ」

わいついた雲雀恭弥（以下雲雀）は、いきなり仕込みトンファーで襲ってきた

右から一発、左から一発。私はギリギリのところだけた

まだまだ余裕はある

雲雀「ワオ、僕の攻撃をよけるなんて。でも次はそつはこかない
よ」

左から一発、右から一発、また右から・・・速いな

雲雀とつりやつ結構できるな・・・私も本氣を出すかな・・・

雲雀「そろそろ、噛み殺してくれないつーー！」

ガンッ

何かと何かがぶつかる音がした

家庭科室は少しの間、静けさに包まれた

何かを腕にはめている麗と何も持たない雲雀の姿があるだけだった

雲雀のトントンファーは床に落ちている

雲雀「ワオ、君やるね」

先に口を開いたのは雲雀だった

麗「今あなたじゃ私に勝てないわね。でも私にこれを見せる
なんてたいした強さよ」

「うつ言つて私は腕につけているものを見せた

その瞬間雲雀がムツとした顔をした

（あつ、意外とかわいい・・・）

雲雀「今日せまいまでにしてあげるよ。ヒルハドヤヒロ置いてあるのは何だい？」

麗「ああ、おしゃべりの」と。

雲雀「ふーん。これがおしゃべりね・・・」

パクッ

雲雀「・・・・何これ。君、いったい何を入れたの？」

麗「えーと、今雲雀さんが食べたのはあんこにマヨネーズを入れ

たものだよ

雲雀「君信じられない・・・やつぱり噛み殺す」

麗「ちよつ、ちよつと待つてよ。私がいつたい何をしたっていつんだよ」

急に襲いかかってくるしげり何なんだよ

それにしてもこつとソンファーを拾つたんだ?

雲雀「いい加減あきらめなよ」

ヒヨン

麗「つた」

ほほから何か熱いものが流れ落ちた・・・血だ

じいつ、私に傷を付けたのか。本当に強いな

でも私に勝つのはまだ早い

麗「あんたのその強さは認めなさうだよ、まだまだだよ」

そう言いながら放つた私の足払いが見事に決まった

雲雀のトントンファーを奪い雲雀につきつける

麗「まあ、こんなものでしょ。いい加減引き上げな

雲雀「ひぬをこよ。噛み殺す・・・と言ったことじりださうめ
ておいか。

君、気に入ったよ。また時間のあるときひねり合はせなよ」

一方的に決めつけて雲雀は家庭科室を出て行つた

全く変なのに絡まれたな・・・

それよりそんなに私の料理はまずかったのだろうか?

s.i.d.e 雲雀恭弥

雪風麗。面白いやつだな・・・

それについては強き普通の女子中学生ではないな・・・

調べてみるか

あいつが雲雀恭弥か・・・

雲の守護者にもつてここだな

それにして、麗の奴相変わらず料理が下手だな。自分で気が付いていないみたいだけだ

これからが楽しみだ

標的 6 弱點（後書き）

こんな感じでよかったですかね・・・

次も雲雀さんは出す予定です (*^-^*)

次回もお楽しみに

標的7 おはなづ（前書き）

こんにちは（^――^）／
タイトルが微妙ですが私にはネーミングセンスがないのでこう承く
ださい・・・

標的7 おはづ

s.i.d.e 笠川京子

登校中ツナ君に会つた

京子「おはよづ、ツナ君

ツナ「おはよづ、京子ちゃん

京子「ツナ君、今日ね家庭科でおじき実習があるんだ」

ツナ「わづなんだ」

あつ、わづだ。今日作ったおにぎりツナ君にあげようかな・・・

さわざと澤田綱吉

京子ちやんたち今頃家庭科でおじぎつを作っているんだろ? な・・・

やつこえま京子ちやんは誰にあげるんだ? ひだか

俺なんかにくれるわけはないし・・・

山本「ねつて、ひつたんだ、シナ? ボーッとして」

シナ「こや、なんでもないよ」

山本「やつか？あつ、わかつたれ。ツナ！」のあとどの女性がおひら
『おつむらおつむか』考えていただろ

ツナ「やつそんな」となによーー！」

山本勘が鋭いなあ・・・

獄寺「野球バカ！！10代目に向かってそんな事を聞くなんて・・・
・（本当はオレも氣になるけど）」

山本「んつ。別にいいじゃねーか。なあツナ

獄寺「うぬせーんだよ」

山本「なんだよ、そのいいかた」

獄寺「ああ。てめーやんのか

山本「別にいいぜ」

ツナ「ちょっと待つて……落ち着いてよ2人とも」

2人に暴れてもうつたら大変なことになるよ……

それにしても本当に2人は仲が悪いよな

ガラガラ

女子たち「監さん。今日は女子が作ったおにぎりを男子にあげ
やぞ」

男子たち「待つてました～！～」

京子ちゃんはどこだらう……

あつ、いた！～

んつ、待てよ。あそこにいるのは……・ビマンキー！～？

ビマンキ「うふふ……」

ああ・・・

ビアンキのやつ京子ちゃんのおじいさんとポイズンクックキングと入
れ替えやがった

京子「シナ君…私のおじいさん食べべ〜。」

シナ「えつ・・・・・」

「れしい・・・・けどそれは・・・・

京子「あつ・・・・シナ君もそかしてしゃけ味嫌いだつた?」

シナ「いや…・・・・・・・・・・・・・・

オレだつて食べたいけどそれには毒が・・・

ビアンキ(歎あれば食べるまよ・・・)

山本「おつ、いのじやつ食べないのか? オレむりこつ」

獄寺「オレももひつぢ」

京子「いいよーー」

ああ・・・それを食べたらダメだ!!

山本、獄寺君それを食べたら死んでしまう・・・そんなのダメだ
!!

ツナ「食べたら死ぬんだぞーー!!」

そうしてオレは山本と獄寺君のもつていたおにぎりをはじき飛ば
した

リボーン「よくフア!!コーを守つたな。それでこそボスだ」

ズガガンツ

ツナ「^{リ・ボーン}復活死ぬ氣でおにぎりを食べーー!!」

パクパクパク

モグモグモグ

ツナ「つまーい

ビアンキ「ポイズンクッキングが効かないー!?

リボーン「死ぬ氣弾をへそに撃つと鉄の胃袋アイアンストマックだ。何食つてもへつちやうだ」

ツナ「たりねー」

生徒「あ、あれ? おこぞりが・・・あー! ツナが食つてゐーっ」

ツナ「まだ足りねー」

生徒「うわーーー! こいつ無差別に食こまくる氣だ! ー誰か止める

ビアンキ「へんつボン! ハレーの代用。でも必ずリボーンを取り戻す」

シユウウ

あつ、死ぬ氣が解けた

オレがちやつたよ～またみんなから変な田で見られるよ

でも、ポイズンクッキングを食べて生きてるのはワッキーだつたな

獄寺「男らしかつたつス、10代田」

ツナ「・・・？」

山本「やるなー、ツナ」

ツナ「・・・？」

何のことだるい・・・？

みんなは、沢田の「食べたら死なんだぞ」という言葉を「オレが京子からもりつたおにぎりを食つたやつはぶつ殺すぞ」「ワカーべりいことつていた・・・」

「Jの田の皿ヤニヒ・・・

ツナ「いつた～おなかが痛い！」

リボーン「ビーヴしたんだツナ？」

ツナ「いや、急におなかが痛くなつてきて・・・」

リボーン（ツナには特殊弾を撃つたから大丈夫なはずだ・・・も
しかして・・・）

「おいツナ、もしかして麗のおにぎりも食べたか？」

ツナ「ん？ 雪風さん？ たぶん食べたよ。それがビーヴしたの？」

リボーン「なるほどな・・・（まさか麗の作る料理がこんなにひ
どいなんて・・・）

それは、食わたりだぞ」

ツナ「えええ～。わ～、おひめつせ～うつだ～」

なんかおなかが痛くなつてきただ
これもあの雪風麗とこいつやつのせいだ
今度会つたら躾み殺しておひ～・・・

s.i.d.e 雲雀恭弥

麗「ハクッション！…」

誰かがうわさしてやがるな…

それにしても今日の沢田はおもしろかったな

今日学校にいたビアンキと獄寺隼人は確か腹違いの姉弟だったよ
な…

獄寺はビアンキと昔何かあつて姿をみるとおなかを壊すんだよな

ボンゴレの行く先が不安だな…

標的7 お手て（後書き）

内容がほとんど原作に近づかかったですね・・・v 3 (—) m ^
言い訳に聞こえるかもしませんが最近学校のことですぐへて・・・
(言い訳ですよね) T_T
原作とは違った内容が書けるよう頑張りますー！

標的8 観察回数2（前書き）

投稿遅れてしまません

土日はいろいろ書いて・・・

標的8　観察日記2

○月 日

この日は最悪だった。何も書きたくない

○月?日

昨日のことを書こう

昨日は家庭科でおきつ実習があつた日だ

私は料理はできないほう?でそこまではひどくないと想ひながらボーンに「お前は料理するな」と言われる(ポイズンクッキングよりはまだう)だから調理室で練習をしていた

そのとき、風紀委員の雲雀恭弥(きなり)入つてきて「噛み殺す」とか言い出して襲つてきた

私は少しリボーンに鍛えられたことがあるから戦いはできる

その私に雲雀は小むくではあるが傷を付けた。一般の人気が・・・だ

さすがはリボーンが田を付けただけはある

これからも雲雀の実力は伸びていくだらう・・・少し怖いな

麗「今日の出来事はこのくらいかな」

私はノートを閉じた

外は日が照つていて暑い

窓をすべて開けると風がよく吹いて気持ちがいい

ここは教室。もう、6時間目も終わって教室には私以外誰もいない

麗「それで、今日は何帰るか？」

ガラガラ

私が教室をでようとしたら誰かが入ってきた

麗「あつあんたは・・・雲雀恭弥ーー！」

雲雀「やつと見つけたよ。今日は何よりも不思議なものを食べさせてくれたね。

お礼に歯み殺してあげるよ」

いや、それお礼じゃないから・・・

やつ思こながり口にはできなー。もつとちやうじへなるか

雲雀「おじぎつを食べておなかを壊したのは初めてだよ。キミ料理でもないの？」

麗「ひとつ料理べりこでできるかー。それでも女房ですか？」

と焦つたよひみたつ

あつぶな。雲雀のやつこきなりントンファードで頭を狙つてきやがつた

」の後も次々と雲雀の攻撃が襲つてくれる

（「こつ・・・今朝戦つた時より腕をあげてこるー…？」）

雲雀の攻撃は今朝よりも動きが速かつた

だんだん壁際に追い詰められていく

麗「あー。めんべくせこな」

雲雀「何だつて？」

めんべくせこと言われたのが気に入らないのかムツとした顔をしていた

私は正直今日は戦つ気分じゃなかつたし、早く帰つて寝たかった

麗「・・・・・」

雲雀「何呟こてるの？早く本戻だつーー！」

私は動きを停めて教室を出て行こうとした

雲雀「キミ、 いつたい何をしたの？」

雲雀も動きを停めていた。いや、動けなかつた

雲雀の足と床が氷で固定されている

麗「さーね」

そう言い残して教室を出た

アレを使うのは久々だったな

○四〇日

やつぱつ雲雀は怖い

昨日のことを根に持っているんか朝からまれた

途中でリボーンが入ってきたから大事にはならなかつたけど、今度会つたら噛み殺すとか言つておそつときそつだな・・・怖つ

○月 日

今日は沢田と三浦ハルとこうやつが接触したらじー

三浦ハル（以下三浦）は、縁中に通つていて頭はいいが時々おかしなことをする

普通の一般人だ

特に不審なことはない？三浦はマークしなくてもいいだらう

月？日

散歩をしていたらあわてて走つてきた男とぶつかつた

その人はすぐに走つて行つたけど何かこの世で起じたとは思えないものを見たつていうような顔をしていたな

後からあつたリボーンに聞いてみたら沢田の家の近くまで来て帰つて行つたらしい

だつたらあんな顔をしていたのも納得がいくな

「入江正一」

ふと頭に思い浮かんだ言葉

なぜこんな名前が出てきたのかはよく分からぬ

月 日

昨日は不思議な夢を見た

なんかリアルな夢だつたような氣もあるけど今はよく覚えていない

何か大事なことを忘れてこむよつたな氣がする

標的8 観察印記2（後書き）

気が付いていますか？

麗の口調がだんだん男言葉になっているのを・・・

性格的には男っぽく設定していますからね

麗（今、私の名前を呼んだ！？）

・
・
「み

？「い・・・ひ・・・す・・・ち・・・ん・・・・麗・・・・を・・・・・・た・・・・・

なの？」「

？「だ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

麗（何なんだひつ・・・・何ひつてるのか全く分からない。でもな
んか懐かしいよみつな『氣』がする・・・）

？「こ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

？「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

? 「…………も、10年バズーカつていつのはず」
「……」

麗（会話がはつきり聞こえるようになったーー）

? 「あなたと言つ人は……不思議なものが好きですね」

? 「アハハ。でも、正ちゃん程ではないと思つな」

? 「そりですかね……自分の妹を利用するような人に言われた
くないです」

? 「…………そのことに触れないでくれる？僕も不安だから正ち
ゃんにお願いしてるんだよ」

? 「丘蘭ちゃん……」

? 「これからひついてだけど…………」

・・・・・・・・・

今は何だったんだ？

夢？にしてはリアルすぎる

私のことを話していたような気がするナゾ・・・内密に押しつけ出せ

ない

何だかう・・・

あの声。とても懐かしい

標的9 ラメ（後書き）

これは麗の記憶なのか・・・

入江正一に会つたことで麗の時間が少しずつ動き出した

これは未来編につながると思います・・・

標的10 篠川ア平（前書き）

急ピッチで書いたので内容が薄くなっているかもしれません・・・

毎度毎度スマスマシノミミ（――）ミム

Side 沢田綱吉

「な、ツナ」「はあ～。始業式から寝坊だよ。こつやぢつ急いでも遅刻だ

リボーン「やつてみなきや分かんねーだろ」

(な・・・何でリボンが・・・)

ズガンツ

「ナ、『いのちをめぐらす。死ぬ氣で登校する』」

? 「！」

シナ「ウムラタマタマ」

ダダダダダダダダダダ

あ～またやつちやつたよ

間に合ひはしたけど恥かいちやつたよ

? 「これは、まぎれもない本物・・・」

！？やべ～人ひっかけてる

ツナ「だつ大丈夫ですか？」

♪ロ♪ロ♪ロ♪ロ♪

「のいきなり前回りを始めたんだけど・・・誰？」

? 「聞きしに勝るパワー・スタミナ・そして熱さーやはりお前は
百年に一人の逸材だ！！我が部に入れ！！沢田ツナー！」

ツナ「えつ、何でおれの名前・・・」

? 「お前のハツスルぶりは妹から聞いているからな」

ツナ「いつ妹！？」

？「おにいちゃん」

？「どうしたキョー？」

キョー「？」

とってもなじみ深いような・・・

京子「もーカバン道に落つ」としてたよ」

ツナ「京子ちゃん！..」

京子「あ・・・ツナ君おはよ！」

えつ・・・もしかしてこの人京子ちゃんのお兄さん！..」

？「せういえば自己紹介がまだだつたな。オレはボクシング部主
将笛川了平だ！..座右の銘は“極限”！..」

あ・・・あつい・・・

了平「お前を部に歓迎するぞ沢田ツナ！！放課後ジムにて待つ！」

ど・・・どうすればいいんだよ

オレがボクシングできっこないけど京子ちゃんのお兄さんに嫌われたくないし・・・

京子「ツナ君す、いな。あんな嬉しそうなお兄ちゃん久しぶりに見たもん！」

「わあ～断りにくくなってきた

オレはボクシングのジムの前まで来ていた

やっぱボクシングなんて無理だよ～どうやって断るの？か・・・

ガラガラ

了平「おお！！沢田待つてたぞ。早速だが紹介しよう。パオパオ
老師だ！沢田の評判を聞いてタイから駆けつけてきたんだ」

（てんめ～）

そこにいたにはリボーンだつた

そこでひつそり

ツナ「お前はめやがったな。オレにボクシングをやりすかー！？」

と聞いてみた。そしたら案の定

リボーン「あたりまえだ。ちつた一強くなりやがれ」

とかえつてきた

京子「ツナ君頑張つて」

京子ちゃんまで応援してくれるヒビリコ

山本「負けんなよ」

獄寺「10代目」

み・・・みんなきてる。ますます断りにくくなつてきた

つていうかなんでみんなパオパオ老師がリボーンつてことに気がつかないの！？

リボーン「パオーン」

ア平「そういうえばあと一人入部希望者がいるんだが・・・まだきとらんのか」

ツナ「あと一人いるんですか？」

了平「おお……あたが。ほら遠慮せずに入ってこい」

お兄さんが無理やりとも見えた形で引つ張つてきたのせなどと。
・雪風麗だつた

ツナ「ゆつ雪風やん……」

麗「はあ～。向でこんなことになるのよ……」

様子を見ると雪風さんもお兄さんに強制的に入部させられそうになつてこりし

リボーン「おもしろくなつてあたな

標的10 篠川了平（後書き）

次は麗が了平にボクシング部に誘われたきっかけが分かるかも・・・

標的1-1 新しいスマートフォン（前書き）

今日は英検の2次試験があつてとても緊張しました

そろそろ夏休みですね

楽しみだな（受験生としての直感なし）

標的11 新しいファミリー

s.i.d.e 雪風麗

なぜか私は笹川京子の兄である笹川ア平にボクシングジムまで連れてこられていた

ア平「遠慮せずにこんが。沢田もこなれ

なんか沢田も巻き込まれてこなれしがあいつこなれにい経験だらつ

それにしてもなんで私が笹川ア平に巻き込まれているかと言ひつと。
・

約3時間前

昼休みは何もすることがないな

校舎の裏をぶらぶらと歩いていた時だった

「おー、お前1年だろ。1年がこんなところを歩いていいのか
ナ」

変な奴にからまれた

確かあこつらは獄寺にやられた3年の奴らだったよな・・・

「おーーー無視してんじゃねーよ。今俺たちは虫の居所が悪いんだ
ナ」

麗「・・・」

「いつまでも黙つてんじゃねーぞ」

麗「わざわざいな

「は?お前何言ってんのかわかつてんだろ?な

麗「・・・・・」

「・・・・・なつなんだよその田は」

麗のこらみで3年が少しひるむ

沈黙のなか緊張感が漂つ

「てめえ、俺たちが手を出さないからってこいつて調子こてんじ
やねーぞ」

沈黙を破ったのは3年の奴らだった

リボーンと云い雲雀恭弥と云い何で私をこりこりせせるやつりが
多いんだ

麗「今私も虫の居所が悪いんだよ」

「てめえ、ふざけんなーー！」

3年の奴らが殴りかかってきた

そんな奴らに麗の回し蹴りがヒットする

「いつて。なにすんだよ」

麗「先に手出しあたのせやつちだから向をやれとも文句はないよな」

そう言つて麗は3年の一人ごび蹴りをくらわす

麗「もつツダウン～張り合このなこやつ」

「うなーー！」

残りは一人。さじどりしようか・・・

「へりへり」

3年のパンチをかわしそいつの顔面に強烈なパンチをたたきこむ

見事に鼻血を吹き出し倒れてく

これは鼻の骨折れたかもな・・・

「つち、なめんじやねーぞ！！」

残り一人

3年が襲いかかる暇もなく麗の蹴りが3年の横腹にヒットする

「うがつ」

麗「つまんないの」

汗一つかいていない余裕の麗の前に3人の男の山があつた
ちょっとやりすぎたかな・・・

まあいいか。先に仕掛けてきたのはあつちだし

? 「こつこれは・・・」

やつば・・・人に見られてた！！

？「おい！これは貴様一人でしたのか！？」

麗「えっとですね、これには深いわけが・・・」

？「お前の強さ・・・気に入った。俺はボクシング部主将 笹川了平だ！ボクシング部に入部ろ！」

麗「なんでこうなるのー？」

麗「雪風麗ですか」

S. i. d e 沢田 綱吉

なんで雪風さんがここに来るの~

リボーン「・・・ニヤッ」

リボーンの奴ますます面白やつな顔をしやがって

しかも雪風さんの制服にっこりのつて血じゃないのーー

いつたい何があつたんだ

麗「私、ボクシングできないので帰らせていただきまーす」

了平「そんなことは俺が許さん！」

「わあ・・・雪風さんからなんか黒いオーラが・・・

麗「そこそこさる沢田綱吉より弱いので失礼します」

えつ、何でいつなるの

雪風をさわさわと出て行かないでよ・・・

了平「そつなのか。3年生3人に対しても1人でやつつけた雪風よ
り強いとは。
では、沢田始めるぞ」

びつじゆつ・・・

ア平「お前のボクシングセンスはプラチナムだ！…必ず迎えに行
くからな」

「わーやつちやつたよ

京子ちゃんのお兄さんを思つつきり殴つちやつたよ

リボーンのやつがオレに死ぬ氣弾を撃つても何も変わらなかつた時にまび
でもお兄さんに死ぬ氣弾を撃つても何も変わらなかつた時にまび
つくりしたな

「てことはこつでも死ぬ氣なんだな…

でも京子ちゃんに嫌われなくてよかつた。お兄さんにまじめに好
かれたよつな氣もするけど…・・

リボーン「おこ、ア平。お前ファミリーに入らねーか

ツナ「ヒロ」「ハーロー。逆スカウトするなー」

リボーンのやつがやつかりしてやがる・・・

俺の人生これからどうなつてくんだよ〜

side 雪風麗

まったく、大変な目にあつたな・・・

リボーンのことだから笛川ア平をファミリーにしているだらつ
着々とファミリーを集めてるみたいだけど沢田のへたれっぷりに

はあきれるよな

ボスがあんなんで本当にボンゴレは成り立つのか・・・

sideリボーン

笛川了平。いつでも死ぬ気とはたいしたやつだ

ボンゴレ晴れの守護者にふさわしい

後は雲と雷と霧の守護者だな

いい加減麗もあきらめて雷の守護者になればいいのに

あいつの戦闘力は半端じゃないからな・・・

季節は夏

笹川了平がシナと戦つてから一週間が過ぎた

蒸し暑い中皆ばてていたが雪風麗・雲雀恭弥の一々はイライラしていた

s.i.d.e 雲雀恭弥

ああ、今日も暑いな。早くこの会議終わらないかな

「えーっ何これ。応接室使つ委員会がある。するいー！」

「おーー風紀委員だぞー！」

「はい」

恭弥「何が問題でもある？」

「いえ、ありませんーすっすみません雲雀さん」

恭弥「じゃー続けてよ」

あー、めんぢくせいな

小動物のくせに反抗して。まあ、僕に反抗する人は噛み殺すけど
だけど、一年の雪風麗は強かった。態度は気に入らないけどあの
強さは気に入った

また戦いたいな。そして血まみれにしてやる

雪風麗、風紀を乱すやつは許さないよ

それにしても暑い

麗「ハツハクショーン！－！」

誰かがうわせじてやがるな

どうせリボーンがなんか言つてるんだがつ

それにしてもイライラするな。暑いせこもあるナゾめぐらしが雪

雀恭弥のせこだな

雪雀のやつ私に会つたびにシントーファーを構えて襲いかかってくる
し、やたら風紀委員をよこしてくるし毎日が戦闘になつてゐるよ

もしかしてまだお元気のことを根に持つてゐるとか・・・・・

器の小つさい男だな

同じ時に雲雀がくしゃみをしたことは麗は知らない

山本「へー、面白そつだな。秘密基地か」

獄寺「子どもか、おめーは

山本はまたなにかの遊びかと思つてゐるのかな

それにアジトってなんかいやだな

獄寺「10代目、いいじゃないすか。ファミリー・アジトは絶対必要ですよ」

いや、「冗談じゃないよ」

マフィアっぽくアジトだなんて・・・

それにアジトを作る場所なんてビコヒトもないよ

リボーン「アジトの場所は応接室だぞ。今はほとんど使われていねーんだ

家具も見晴らしもいいし立地条件は最高だぞ」

山本「そんじゅ、行くか

えへ。本当にアジト作るの~

あ~。なんだかんだ言つて応接室の前まで来りやつたよ~

山本「へ~。こんな良い部屋があるとほむな

学校の中にこんな良い部屋があつたなんてビックリだな
んつ？誰か先客がいたみてーだな

雲雀「君、誰？」

「、こいつは風紀委員長でありながら不良の頂点に駆臨するビバ
リ」と雲雀恭弥！！

獄寺「何だあいつ？」

山本「獄寺、まて・・・」

雲雀「風紀委員長の前では煙草消してくれる？ま、ビバ
タダでは帰らないけど」

獄寺「んだとてめー」

聞いたことがある。雲雀は気に入らねーやつがいると相手がだれ
であろうと・・・

雲雀「消せ……」

ビュッ

仕込みトントンファードで滅多打ちにするつて

厄介なのに捕まつたぞ

獄寺の煙草の火を一振りで消しやがった

雲雀「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ。視界に入ると噛み殺したくなる。まあ、雪風麗みたいな肉食動物でも僕が噛み殺してあげるけど……」

雪風麗「……？ 雲雀といつたいどんな関係があるんだ？」

ツナ「へへ。初めてはいるよ、応接室なんて」

山本「待てツナ！！」

「……で部屋の中に雲雀がいる」と知らないツナが入ってきてしまった

ガツ

ドザマツ

雲雀「一匹」

くやつ。ツナが雲雀のトンファーで殴られた

獄寺「いのやひ、ぶつ殺す！」

獄寺のパンチを余裕でかわした雲雀は獄寺もトンファーで殴る

雲雀「一匹」

山本「てめえ・・・！」

雲雀がトンファーをかまえ山本を襲う。山本は何か攻撃をかわ
している

雲雀「けがでもしたのかい？右腕をかばっているな

山本「・・・！」

雲雀「当たり」

その瞬間雲雀が山本の右腕に向かって回し蹴りをくらわした

部屋の隅まで吹っ飛んでいく

雲雀「三回」

あ～いて～

s.i.d e 沢田綱吉

こつたに何が起つたんだ？部屋に入つていきなり何かで殴られ
たし・・・

ツナ「・・・・・獄寺君・山本・なつなんで・・・？」

周りを見渡したら氣絶している獄寺君と山本が倒れていた

しかも、学校の中で最強と言われる雲雀恭弥がトンファーを構えてオレの前まで来ていた

雲雀「2人は起きないよ。そういう攻撃をしたからね。まあ、あの子だつたらこんな攻撃はきかないだろうけど・・・」

ツナ「えつ・・・・・」

つてことは、この人一人で獄寺君と山本を倒しちゃつたってことー？

やばいー！ー！のままじや殺されちゃつよ

雲雀「あつべつしてこせなよ。救急車は呼んであげるから

うわあーめりやくひやパンチー！

チャキッ

んなう。リボーンの奴こんな時にオレに銃を向けてやがる。もしかして死ぬ氣弾を撃つつもりじゃ・・・

リボーン「死ね」

ズガニッ

ツナ「^{リボーン}復活!!!死ぬ氣でお前を倒す!!!」

雲雀「何それ。ギャグ?」

雲雀がトンファーを思いつきつ上に振り上げる

ガツ

ドッ

トンファーがツナのあいにヒットした。ツナは床に倒れこむ

雲雀「あい割れちゃったかな。さて、後の2人も救急車に乗せてもらえるくらいにぐちやぐちやにしないとね」

その時雲雀の後ろでツナが起き上がる

ツナ「まだまだあーーー！」

ツナのパンチが雲雀の左ほほを殴った。雲雀は驚いた顔をしている
レオンがツナのもとに飛んできてスリップパに形を変える。それを
ツナが持つて

ツナ「ここのたわけがーーー！」

パカアン

雲雀の頭をたたいた。雲雀が一瞬ふらついた

雲雀「ねえ・・・殺していい？」

雲雀が殺氣を出したとき

リボーン「やひまでだ。やつぱみお前つえーな

リボーンが止めに入った

雲雀「君が何者かは知らないけど僕、今イラついているんだ。横になつて待つてくれる」

トンファーをまわして勢いをつけながらリボーンに向かつて振り下ろす

その攻撃をリボーンは十手を使って止める

雲雀「ワオ。すばらしいね君」

リボーン「また今度雪風麗について教えてやるから今日はいいま
でにしてくんねーか?」

雲雀「……雪風麗についてね……まあいいだりつ。赤ん坊、
今度会つたときは本気で勝負しようよ」

リボーン「気が向いたらな……」

ツナ「なあ……あいつにわざと会わせた……」

俺たちはどうやって逃れたか分からぬけど屋上に来ていてリボーンから衝撃的事実を聞かされていた

リボーン「危険な賭けだつたけどな。打撲とすり傷ですんだのはラッキーだつたぞ。」

お前たちが平和ボケしないためのトレーニングだぞ」

何言つてんだよ~絶対に雲雀さんに田付けられたよ

リボーン「雲雀は将来必ず役に立つぞ」

ファミリーをまた一人ゲットしたと思っているリボーンだった

標的1-2 草食動物と肉食動物（後書き）

雲雀と麗つて少し似ているところがあるんですね・・・

戦いが強かつたり1人が好きだつたり

リボーンが雲雀に麗のことを話すところは省略しますがもう少し
たら麗の過去が分かるかも・・・

次回もお楽しみに！！

田〇田

今日は体育祭だ

そういうえば体育祭のクライマックスに行われる“棒倒し”の総大将に選ばれたのは沢田だったな。

笹川に強制的にさせられていたが・・・あいつにそんなことがでできるのだろうか？

昨日河原で練習しているところを見たけど全然駄目だな

山本は持ち前の運動神經でかなりいい成績をとっている

獄寺と笹川は会つなり喧嘩を始めた。まあ、嵐の守護者と晴れの守護者は相性悪いからな・・・

三浦やビアンキたちは沢田の応援に来ている。リボーンはどうと何か面白いことを考え付いたらしそ

（リボーンの面白いことはややこしいことになるからな・・・）

案の定沢田がほかの総大将を襲つたと思われて言い争いになつている

そんな中、笹川が2対1という無茶な提案を押し通すし相手チームの総大将が雲雀恭弥になるしかなり混乱していた

結果は言つ間もなく沢田がぼこぼこにされて終わった

月 日

今週はいろいろなことがあったな・・・（沢田にとひて）

まずは『殺され屋』のモレッティがあらわれて沢田を驚かせていたな

次の日にはランボとビアンキとリボーンによつてはめられて山本の家のすし屋でバイトすることになったな。さらに獄寺のせいで借金上乗せされてたしその分は自分が責任をとるつて出前の分はビアンキが作るつて言つて焦つていたな

ビアンキがまともな料理を作れたと思つたら時間差でくる“ポイズンクッキング3時間殺し”という新技を開発しちゃつたので出前はできず・・・

沢田、当分バイト三昧決定・・・

?月〇日

今日はボンゴの守護者が校庭に集合していた

私は屋上で観覧している

リボーンに教えてもらつたがこれからランボの保育がかりを決めるらしい

まあ、結果は目に見えているが・・・

獄寺は10代目の右腕の座がほしいゆえに頑張つてランボをあやしていたが結局はキレイてしまい山本の番に移つてしまつた。山本はキャッチボールをしようとしているようだ。最初はいい雰囲気だったが山本がボールを投げる瞬間目つきが変わつた。本気で投げたボールがランボの顔に直撃して泣かせてしまった

最終的に沢田がランボの保育がかりに決まった

それにもしても山本のボールの威力半端じゃねー

ランボに当たつてそれたボールがここまで来たが壁にひびが入つてぞ・・・山本恐るべし

?月?日

登校中犬に襲われそうになつてゐる沢田が小さな女の子に助けられてゐるところを発見した

特に興味がなかつたからかわらなかつたが子どもに助けられるほど弱いとは・・・

んっ？そりいえばあの女の子人間爆弾といわれてる香港の殺し屋のイーピンじやなかつたつけ？

廊下でイーピンに何か言われている沢田を見かけた

屋上まで連れて行かれた沢田はイーピンの“餃子拳”をくらつていた

その技の正体がニンニクであることをからかつてイーピンの“筒ビ子時限超爆”を発動させてしまった

山本が何とか上空へ投げてくれたからよかつたものの沢田のへたれつぶりに改めてガツカリする

これからはイーピンを挑発しないようにしないとな・・・

そういうえば私がボンゴレの関係者って知っている人って何人いた
つけ・・・?

沢田が知っている人でいえばシャマルとリボーンとビアンキぐら
いかな・・・

他の人は沢田が知らないからな・・・あつー!跳ね馬・ディーノ
!!

あいつのことだからいつかは沢田に会いに来るだろ?な・・・そ
の時あいつに会つたら絶対に私の正体ばらされる!・!

ボンゴレの関係者なんてばれたら雪の守護者のことが断りにくく
なる

ディーノにどうひかって口止めしよう・・・

標的1-3 観察口記3（後書き）

なつめ少なくてすみません（・・・）

次回は面白い作品をかけるよつて頑張りたいと思います

標的14 跳ね馬ディーノ（前書き）

なんか原作と変わらないような・・・

でも次回はオリジナルが入るので飽きずに読んでください!!

標的14 跳ね馬ディーノ

Side 雪風麗

私は、雪風麗は焦つていた。そう、叫びたくなるほど・・・なぜかつて？それはあいつが・・・ディーノがこの並盛に来たつて情報が入つからなんだよ！！

あいつが沢田に会うのはいいとしてあいつと沢田が一緒にいると
き私と会つたら絶対にボンゴレとの関係をばらされる。それだけは
絶対に阻止しなければならない

あいつのことだから直接沢田の家まで行くだらう。たくさんの部下を連れて・・・

大方予想はついているからどうやつてティーノを口封じするのか
が問題だ

side 沢田綱吉

なつなんだこれ～！～！

今日、普通に学校で過ごして家に帰ってきたら家の前に高そうな車が何台も止まっていた

オレ何も悪いことしてないよな・・・？それに家の前に立つているスーツを着た人はいつたい誰なんだろう？それにしても迫力が半端ない・・・

ツナ「あの・・・すいません、通つてもいいですか？」

男の人「ダメだ。今は沢田家人間しか通せないんだ」

ツナ「えつ・・・沢田綱吉ですけど・・・」

男の人「なつ……この方が……」

家にあがらせても、もう「こ」とはできたけど、いつたい何なんだ！？またリボーンの仕業だとは思うけど……

オレの部屋に向かいながらそんなことを考えていた

部屋の扉を開けると中にもスーツを着た男の人人が何人かいた

リボーン「待ってたぞツナ」

ツナ「いつたいこれは何なんだよ」

「ディーノ」「いよお、ボンゴレの大将。はるばる遊びに来てやつたぜ。オレはキャバローネファミリー10代目ボスディーノだ」

またマフィア関係者が来た（しかもボスってどれだけ怖いんだ）

これからオレどうなるんだろう……

sideディーノ

ツナ「なー?」

リボーンがボンゴレの10代田を鍛えてるって聞いて見に来てみたがこれは・・

ディーノ「こりゃあダメだな。オーラがねえ、面構えが悪い、霸王もねえし期待感もねえ。幸も薄そうだ」

リボーン「足も短けえ」

ディーノ「ボスとしての資質ゼロだ」

ツナの奴ショックを受けた顔をしてるな

ディーノの部下「ハハハハハハハハハハハハ

ツナ「おいリボーン! 何なんだよこのやばい連中はー。」

リボーン「ディーノはお前の兄弟子だぞ」

ツナ「は?」

ツナの奴動搖しまくりだな。麗が嫌がっていた理由はこれが・・・まあこんななんじや守護者なんかしたくないよな。それにしてもこいつ俺の昔にそっくりだな

リボーンのおかげで今じゃ5千のファミリーを持つ一家の主だ。本当はもつといろんなことを教わりたかったがツナのところに行くつづつ泣く泣く送ることになったが・・・

ツナ「あの・・・わざから誤解してると思つんですけど、僕はマフィアのボスになる気なんてサラサラないんです」

ディーノ「ハハハ、リボーンの言つとおりだ! オレも最初はマフィアのボスなんてクソくらえと思ったもんだ。ハナからマフィアのボスを目指す奴に口クなやつはいねー。お前は信用できる男だ」

ツナ「いや・・・でも僕は・・・」

side 沢田 翔吉

「Jのディーノっていう人かっこよくて若いけどマニアのボスなんだよな・・・

いくら兄弟子でボスだからってその人に言われてのオレはボンゴレの10代目を継ぎたくないんだ

ディーノ「一生やらねーつーんなら・・・」

なんだ!? ポケットに手を突っ込んで何をとりだすんだ?

もしかして拳銃!? オレ撃ち殺されちゃうの〜いやだそんなの〜!

ディーノ「かむぞ」

ツナ「うわあ〜！〜！」

え・・・・・?

カメ・・・?

ディーノの部下「ハハハハ！ ひつかつた！ ！」

もしかして・・・今のおやじギャグ・・・?

ディーノ「こいつはカメのエンツイオつて言つてリボーンにレオ
ンくれつて言つたら代わりにくれたんだ」

リボーン「レオンは俺のだからな」

そんなこと知るか！！

ランボ「ガハハハ、枝付きブロッコリーだぞー！」

またあいつらか・・・

ランボがイーピンを追いかけまわして遊んでいる

緊張感のないやつらだなあ・・・ああ、またランボの奴手榴弾持つて走り回つて・・・あれほど危ないからやめろって言つたのに

ランボ「ん！？ くぴゃー！」

言つたこつちやない。コンセントに足をつっかけて転んだよ・・・

ランボ「ガ・マ・・・・・ん？」

ツナ「バカー！！」

ああー！どうしようつ・・・！？ランボがこけた拍子に手榴弾が髪の毛から出てしまつたよ・・・
しかも、ピンが抜けた状態で部屋の外に・・・

リボーン「やべーな。外には『ディーノの部下がいるぞ』

ツナ「あつー…そついえーばー…」

バッ

突然『ディーノさんが窓から外へ飛び出した

（えー！ー！ー！ー階だけど大丈夫なの！？）

ディーノ「てめーら伏せろーー！」

そういつた『ディーノさんはムチを取り出して手榴弾をからめ上に放り投げた

その瞬間手榴弾が爆発した。後一瞬でも遅かつたらどうなつてい

たか・・・

ツナ「あの人かっこいい・・・」

リボーン「わかったか？ファミリーのために命を張るのがマフィアのボスだ」

ツナ「何でもかんでもそこそこ結び付けるなよーー。」

リボーン「ディーノ、おまえ今日は泊つてこけ

ディーノ「オレはこなつらがな

リボーン「部下は帰していいぞ

おいーーー何勝手に決めてんだよーーー

ああーーーオレはマフィアになんてなりたくないしかかわりたくない
もしないんだよーーー

ディーノさんに気に入られるのはうれしいんだけどマフィアにな
るのは絶対ごめんだじーーー

ディーノ「そーいやツナ、お前ファミリーはできたのか?」

リボーン「今んとこ獄寺と山本。あと候補がヒバリと笹川ア平と
・・・

ツナ「友達と先輩だからーーー」

ああ、これから先が不安だよ・・・

ツナはこれから『ティーノ』が部下がないと何もできに事を知るこ
とになる

そしていろいろな災難に巻き込まれることは少し先のはなし・・・

ああ、どうしよう‥‥

早速トマーノに口上をしつかわせやーーーーーー

今さら立てるんだがー

一人嘆いていの麗であった

標的14 跳ね馬ディーノ（後書き）

どーも、今日も暑いですね（そちらがどうかわかりませんが・・・）

最近Walkmanを買ってテンションが上がっている音無ですが
なかなか夏休みの宿題が手につかず・・・

でも小説のほうはちゃんと全開です！

今後とも応援よろしくお願ひします（^-^）

標的1-5 並盛中央病院（前書き）

夏休みとにかくとでこつもよつ長めで作つてみました

標的15 並盛中央病院

side沢田綱吉

ああ～何でこんなことになつたんだろう・・・

オレは今、並盛中央病院に入院している

なぜこんなことになつたのかといふとディーノさんがトレーニングということでオレにムチさばきを教えてくれることになつたんだ。（オレは全然嬉しくないけど・・・）

スパーリングパートナーとしてスponジスッポンのエンツイオが相手になつてくれたんだけどオレがムチで飛ばした方向は井戸があるところで大変なことになつたんだ。エンツイオはディーノさんがなんとかしてくれて助かつたけどそのあと俺が一人でこけて入院するはめになつたんだ

オレってどんだけドジなのかな・・・

しかも同室の人はといふと・・・

同室A「おーす、新入り」

同室B「その鞄は並中生か」

同室A「中坊つて」とお前」の部屋で一番下つ端だな」

同室B「新しいパシリ誕生つてわけだ」

同室C「松葉杖で歩けそうだよね。コロコロパークー」

超嫌な感じ・・・

その時デイーーさんガオレの見舞いに来てくれた。たくさんの部下を連れて・・・

病院の人超怖がつてゐるよ

デイーー「ツナ、病院はボスが狙われやすい場所の一つだ。お前持つてなかつただらう? やるよ護身用の銃」

ツナ「...」

デイーーさんいつたい何を出しているの~!

いまだき銃を護身用に持つてゐる中学生なんていないし...オレには必要ないし...」

同室ABC「ひいつ、助けて～」

同室の人逃げ出しちゃったよ

婦長「困りますわよ沢田さん。他の患者さんを怖がらせるような方のお見舞いは…！」

ツナ「す、すみません」

といつことでオレは別の部屋に移ることになった

ツナ「やつた～個室だ！」

誰かとおんなじ部屋にいるより1人のほうがずっといいや

だけどその後イーピンやリボーン、ハル、しかも京子ちゃんまでケガの時は笑いが一番つて言つてなんか変な格好をしてお見舞いにきた

それを考えたのはハルだつて言つてたけどハルの企画つていつも突拍子がないんだ・・・

そのおかげで婦長さんがまた怒つてきた

そのとき山本が大量のお寿司を持つてお見舞いに来てくれた。しかもおとなランボまで

正直オレはけっこー嬉しかった

獄寺「10代目……大丈夫スか10代目……」

ツナ「君が大丈夫かー！！！？」

オレのことを叫びながらきた獄寺君は血だらけになっていた

聞くところによるとお見舞いに来る途中あわてて車に何度もひかれたらしい

獄寺君は平気って言つてるけど絶対に大丈夫じゃない……って
いうか俺より重症だよ……

獄寺「すみません、白いバラだつたんスけど……」

白いはずのバラは真っ赤に染まっていた

そのときドアがミシミシいい始めてドアが倒れたと思つたらたくさん
さんの看護婦が倒れてきた

婦長「何ですかあなたたち！…」

看護婦「婦長ばかりずるいですよ！…一人で日の保養をして！…」

婦長「困りますわよ沢田わん！…うちの看護婦をそそかすよつ
な方のお見舞いは！」

ツナ「そつちが勝手にそそかされたんでしょ！…」

なんか納得いかなかつたけどまた病室を移ることになつた

その部屋にあの恐ろしい人がいるとは知らずに…

sideディーノ

なんとかわからないけどあの婦長さんめっちゃ怒つてたな・・・

そう思いながらオレは病院を去りつとしていた

何で銃を持ったたらダメなんだ？命を狙われるかもしけねえってのに

部下「ボス・・・前から来るの方はもしかして・・・」

ディーノ「ん・・・あいつは・・・麗じゃないか！！」

向こうもオレに気が付いたらしくオレを見るなり驚いた顔をして駆けつけてきた

麗「なんであなたがここにいるのですか・・・？」

なんか気に食わないような言い方だなあ・・・

麗「私はディーオーは沢田綱吉のところカリボーンのところにいる
と思つてたけど・・・」

ディーオー「その予想はあつてゐる。今ツナのお見舞いに行つてき
たところだ。でもな、オレがツナに銃を渡そうとしたら婦長が起
つてな・・・追い出されたんだ」

麗「あたりまえだよ・・・日本では銃を持つてること自体あり得
ないんだよ」

ディーオー「そうだったのか・・・ところでお前は何しに来たんだ
?」

そこでオレは気になつていていたことを聞いてみたが麗はただ肩をす
くめるだけで教えてくれなかつた

（な・・・何でこんなところに『ティーノ』がいるんだ！？）

私が並盛中央病院に入ろうとしたとき会いたくなかったような会
いたかつたような奴に会ってしまった

ティーノ「麗、久しぶりだな」

麗「そうですね。3年ぶりじゃないですか？」

そのあと軽く会話をしていた。そしたら『ティーノ』がなぜここに來
たのかと聞いてきた

その理由は絶対に知られたくない！…だから軽く流したけど『ティ
ーノ』は不満そうにしていた

麗「ディーノ、沢田綱吉にはもう私のことはいったか？」

「……でディーノに一番聞きたかったことをいつ

もし言つていたら沢田にどういって貰おうかと考へる

ディーノ「ん……麗、まだ自分の正体を言つてなかつたのか。オレが言つてたほうがよかつたか？」

麗「いや。まだ言つてなくてよかつた。しばらくは正体を明かさずに沢田綱吉をボスとしての資質があるのか見極めていきたいと思っている」

ディーノ「そうか……ならお前とは他人のふりをしないとな」

さすがディーノだ話が分かる。部下がいないとダメだけどな……

まあ、これで沢田に私の正体がばれる心配はなくなった

それにしてもなぜ私があの人の見舞いに来ないといけないんだ！
！このままバツクレてもいいけどそしたら確実にあの人とつけられるからな。今の時点で目つけられてるかもだけど……

あとあと面倒だしあつたと行つてやつやと帰るか

・・・・・そう思つてあの人の病室までいったけど・・・

何で沢田綱吉までいるんだ！？

いろいろあってオレはある病室に移る」とになったが・・・

な、何で雲雀さんがいるの〜！？

雲雀「風邪をこじらせてね、退屈しきにゲームをしていたんだ
がみんな弱くて・・・」

ツナ「んなー！？」

何があつたのか分からぬけど雲雀さんの前には氣を失つて
いる人の山ができていた

ゲームつていつたい何なの！？負けたら絶対殺される・・・

雲雀「相部屋になつた人にはゲームに参加してもうつてゐるんだよ。ルールは簡単。僕が寝ている間に物音をたてたら噛み殺す」

ツナ「一方的！？ってか病院じゃあり得ない状況だー！」

「この部屋絶対無理ーー！」こりこりんだつたつら家にいるまつがましだよ

ツナ「あの・・・もつとくくなつたので退院しますーー！」

院長「ダメだよ医師の許可なく退院しちゃ

ツナ「ーー？」

雲雀「やあ、院長」

い、院長ー！？

何で雲雀さんと院長が・・・？

院長「いやして安心して病院を運営できるのも雲雀君のおかげ。生贊でも何でもなんなりとお申し付けください」

病院ぐるみーーー院長さんかなり深く礼しかやつてないよ・・・ビンだけ雲雀さん偉いんだ?

それに生贊つて確実に殺されるじゃんーーー

雲雀「じゃあそろそろ寝るよ。ちなみに僕は葉が落ちる音でも田を覚ますから」

院長「では失礼します」

え・・・「うそーーーゲームスタートーーー?」

マジですか・・・

オレが絶望的危機に陥つているとき、きなりドアが開いた

そこから入ってきたのは・・・

雲雀「ん・・・やつと来たか。遅いよ麗」

麗 「せっかく見舞いに来たのに文句言わないでよ。何で私が・・・
な、何で沢田綱吉までいるの・・・!？」

4か月前に転校してきた雪風麗だった

ツナに麗の「ことば」がばれてしまつのか！？

その流れについては磁界をお楽しみに（* ^__^ *）

標的16 恭弥と麗

side 雪風麗

麗「な、何で沢田綱吉までいるの～…？」

「この病院にいることは知つてたけどまさか雲雀恭弥と一緒に部屋にいるなんて…・・・

それに雲雀恭弥のやつ私が来るなり遅いとはなんだ！無駄に態度がでかい

まあ、雲雀恭弥を入院させる原因をつくったのは私だから文句は言えないけど、ムカツク

ツナ「え・・・何で麗さんが雲雀さんの病室に・・・？」

雲雀「小動物は静かにしてくれる？それより麗、君のおかげで入院するはめになつたんだから毎日見舞いに来るのは当然じゃないか。なんか文句ある？」

麗「もちろんあ・・・りません・・・・・・（つづ）」

あると並んでいたトランプを構えやがつた・・・卑怯者――

それにしても雲雀（もつ呼び捨てでいこや）の前に立てるやつら完全に伸びてるな。これが病人のすることか？

雲雀「今舌打ちしたでしょ・・・まあいいや。風邪で休んだ分の仕事は麗にも手伝つてもうから」

麗「なんで～」

雲雀「いつなつたのが君のせいだから」

麗「うう・・・わかったよ。一日だけだからね」

まあ、あそこでわけのわからなこよつな顔をしている沢田綱吉はほつといてなぜ雲雀が入院しているのを私のせいにしているのか説明しようつ

原因を作る」となったのは3日前の放課後だった

私はすゞしくライラクしていた

なぜかといふと、ボーンが私を雪の守護者にすることをなかなかあきらめてくれないからだ。そして第一の理由は・・・

ここから、風紀委員がしつこいこと・・・

雲雀の差し金かどうかはわからないけど毎日毎日昼休みや放課後に待ち伏せしてくる。話を聞いたら風紀委員に雲雀が推薦して言つから入れの一点張り。正直日障りなんだよね

それに風紀委員に入れつて・・・絶対いやだ！！

そんなことを思いながら風紀委員とじりじりみ合っていた

風紀委員「いい加減あきらめて風紀委員に入つたらどうだ? セツ
かく雲雀さんが

誘つてこゐるの? ・・・」これは名譽なことだぞー。」

麗「しつこいな・・・絶対やだつて言つてんじやん」

何が名譽だ・・・そんなのやつとも嬉しくない! ・・・

麗「入る氣は一切ないので帰らせてもらひつていいですか?」

風紀委員「雲雀さんは何日も待つてゐるのだ。やうやく決断して
もうわなくては」

つけ・・・私がおとなしくしてゐるからつて調子に乗りやがつて
そりそり痛い田見してもいいかな。そしたらいい加減あきらめる
だろ

風紀委員「・・・」

ん? どうしたんだ? 風紀委員の空氣かわつた・・・何かあつた
のか?

風紀委員「ひ・・・雲雀をさーーわざわざいろいろこらしたのですかー!？」

雲雀「君たちが遅いからだよ。のりこやつはこらない。3秒待つからこりから消えてくれる」

風紀委員「は・・・はいっ！」

「わあー本当に3秒で行っちゃたよ。速いな・・・

麗「風紀委員もこなくなつたし帰るか」

突然だが今日は雨が降っているのだ。だからさつままでのやうとりをしていてびしょぬれ・・・

早く家に帰つて風呂に入りたいな

そう思いながら校門を出ようとしたときだった

雲雀「ねえ、雪風麗。こつまで僕をこの窓の中立たせておくつもりだいっ！」

麗「……」

雲雀「はあ……君はいつたい何様のつもつ……」

麗「……分かった、分かった。無視はしないからそのトンファーはしまつて！」

私が校門を出よつとした瞬間トンファーを構えて戦闘態勢に入つていた

気付いてはいたけどやっぱ無視はダメか……

雲雀「もつ聞いてこむと思つけど風紀委員の仕事は……」

麗「……は？何言つてゐの……？私は風紀委員に入る氣なんてサラサラないんだからね……」

雲雀恭弥のやつ勝手に話進めやがつて……あんたじや何者だつのひつ

雲雀「君に拒否権はないよ。そもそもこのまへがわざわざ頼のところまで来て風紀委員の仕事を教えているんだ。それこそありがたく思つてほしいな」

麗「…………私がおとなしくしていれば調子に乗って……」

雲雀「！」のぼくにへりたえする『氣かい？』

麗「……（ブツチ）ああ～もうひきいんだよー。」

私の怒りが頂点に達したときつい“能力”を使ってしまった

雨が降っていたので効果がいつもより増してしまった。しかもいつもついていたから手加減をしていなかつた

我に返つたときは雲雀は全身を氷ずけにされていた

麗「え、えいひひひ・・・ひこやひひひたよ」

とりあえず雲雀の周りにあった氷を溶かして……あつーほかの生徒に見られてないよね……？

周りを見てみたけど私と雲雀以外の生徒はいなかつた

雲雀「……ん。いつたい何をした？」

麗「よかつた・・・生きてた」

雲雀「勝手に殺さないでくれる? それにしても寒い・・・」

ああ、よかつた・・・人殺しにならなくて

このままにしていても雲雀が凍死しそうだったから応接室まで連れて行つて寝かせた

その翌日に聞いたことだが雲雀が生まれて初めて風邪をひいて入院したらしい。そして懲りずに風紀委員が来たと思つたら雲雀の伝言を伝えに来たという。その内容は・・・

“雪風麗、君のせいで風邪をひいたんだ。必ず毎日お見舞いに来るよ!”。

“来なかつたら噛み殺すからね”

ところへと私は雲雀の見舞いに毎日来せられてくる

雲雀の病室に沢田綱吉がいることは予想外だつたがあいつはバカだから何とかなるでしょ？

ツナ「雲雀さんと雪風さんって知り合つたんだ・・・」

雲雀「うぬわこよ。小動物は黙つてくれる？」

ツナ「す、すみません」

麗「雲雀さんそんなこと言つたりダメですよ」

雲雀「ムツ・・・君に言われたくないよ」

そんな会話をいくらかした後とても気まずそうな沢田を残して病

室を出て行つた

病院を出たときに空から爆発音が聞こえたけどまあ、気にしない
ことにした

標的1-6 恭弥と麗（後書き）

いつたい麗の能力ってなんなんですかね・・・？

これで雲雀と麗をからめやすくなりました

雲雀は意外と麗のことを気に言つていたりして（#へ・へ#）

次回はどんな話こしようかな・・・

標的17 雲雀の意外とシナの不幸（前書き）

今日は24時間テレビ少しだけ出てしました・・・

ほんのちょっとですけどね

そんなふうでトランシジョンが上がつてこる音無です――！

標的17 雲雀の意外とシナの不幸

Side雪風麗

麗「あ～～～。雲雀のやつ結局退院するまで毎日見舞いに来させやがつて。私もみんなに暇じやなこいつーのは～～毎日会つていたせいでこいつも大変なことになつちやつたじやないか」

今私は血がのベットで寝てゐる

11月21日 時刻は毎の1時

本当なら学校にいなくしてはいけないのになぜ血がのベットで寝てこらのかといつと・・・

麗「雲雀のせいで私まで風邪を引いたんだ～～～～～～」

雲雀「こきなり向かんでゐるの？」

麗「何で雲雀がいるの？」私の家ですよね・・・？」

雲雀「やつだよ。そんなことも分からぬのか？かなり重症みたいだね」

よし・・・一回整理してみよつ

雲雀が退院したと同時に私が風邪をひき学校に欠席届を出した。その翌日誰かが家のチャイムを鳴らしてティーノだと思い込んだ私がドアを開けると雲雀がいた。おかしいと思い一回ドアを閉めもう一回開けるとそこにはティーノが・・・ではなくやはり雲雀がいた

そして雲雀は何事もなく部屋に入ってきた今この状態にいたるつと・・・よしひ、整理完了！

じゃない！――！

何で雲雀が私の部屋に――あきらかにおかしいでしょ――！――

麗「つていうか何で私の家を雲雀が知つてんの！？」

雲雀「さつきから何で呼び捨てになつてんの？」「

麗「そんなことはいいからじつじつ――！？」

雲雀「まあいいか。じつちも麗つて呼ぶし。住所はパソコンで調べた。風邪については並盛中央病院の院長に聞いた。僕の風邪がうつたと聞いてお見舞いにね・・・」「

麗「余計なお世話だ！！」

雲雀「僕の行為を余計なお世話だと・・・」

麗「すみませんでした。家の中で暴れないでください」

何があるたびにファームを出すのはやめてほしいな・・・

家中壊されても困るし

それにしてなんでも見舞いに来るんだろう? いくら雲雀のせいだからといって見舞いに来てもらひの義理はないのに。変なもん食べたとか・・・

雲雀「さつきから何不満そつな顔をしてるの。せっかく来てあげたのに」

麗「誰も頼んでないし」

雲雀「ねえ、君つていつたい何食べてるので？」

麗「なによ、こきなり」

雲雀「台所に食べ物とは思えないものがたくさんあつたから」

麗「勝手に見たのか！？」

雲雀「せっかく見舞いに来てあげたのに寝るからだよ。ほかにもいろいろ見せてもうりつたよ。それより君つてもともな料理できないの？」

麗「つねにやいな・・・メニュー通りにつくつてもなぜか失敗するんだよ」

もつたいないから一応食べるけど味は微妙。ときどきおなかを壊すときがある

たまにリボーンが来て私の分も作ってくれるけど一年の半分ぐらいいは買つてきたやつかな・・・

雲雀「ふうーん・・・じやあ僕は出でへよ」

麗「ん・・・じやあね」

やつと帰つたか・・・

でもひとつだとなんかな・・・とかどうぞ不安になるところがあるんだよな

まあ、暇だし寝よつ

ん・・・良い匂いだな

リボーンが来て何か作ってくれたのかな

雲雀「起きた?」

麗「な・・・なんで!?.帰つたんじゃないの?」

雲雀「出でいくとは言つたけど帰るとは言つてないよ。やれこしてよく寝るね」

麗「ついでに一つ。ほかにあります」となつから仕方ないの!..

雲雀「じゃあ、これでも食べたら?」

麗「さあ、雲雀はいろいろな野菜の入ったおかみを出してきた

麗「これ、雲雀が作ったの…」わあ～おこしあり…」
「いただき
ますわー。」

一口食べると野菜の甘みがあつてとてもおこしかった。しかも野菜が食べやすく述べに細かく切つてあった。雲雀にしては気遣いがわざるよつな…・・・まあいいか

雲雀「・・・フッ」

麗「何か言つた?」

雲雀「別に。それよつ早く食べなよ」

麗「うん…。」

それからおかみを全部食べて雲雀にお礼を言つてから帰した

雲雀は強引で意地つ張りだけど優しいところあるじゃん

それに、台所。あれだけ散らかつてたのにきれいになつてゐる

意外と家事できるのね・・・つらやましいな

今日は疲れた

でも、麗のやつ僕の作ったお粥あんなにうれしそうに食べて・・・

side 雲雀恭弥

意外と子供っぽいところがあるんだな

子供は嫌いだけど麗はまだいいか・・・

そのとおり、ツナたちはとこうと・・・

Side 沢田 綱吉

今日も雪風さん休みなんだな・・・雲雀さんもいないし

先生「次の問題を・・・沢田、解いてみる」

つてこなことを考えてる所じゃない!!

今日は授業参観だ。あれだけ来るなって言つたのに母さんは来て
るし・・・

ああ、どうしよう・・・

山本はあくまでもう一度きてたし、オレもいけるかな

ツナ「うーん」

パコーン!!

いつた～！なんだ・・・？

投げられたものを見てみるとそれはゼリウムだった

リボーン「物騒よね～」

リボーンの声がして後ろを振り向くとなんかキモイばあちゃんがいた（リボーンが変装した姿だけ）

あ・・・一ぞり投げてきたつことは、オレの答えが間違つてるからか・・・ってことは
次間違えたら殺される・・・！

先生「沢田がいた？」

ツナ「いや・・・あの・・・」

ランボ「はーーーー100兆万です」

ツナ「ランボ!!」

ツナ母「「」めんなさい。うちの子たち向です」

ツナ「母さん！」

ああ・・・ランボがオレの関係者だつてばれたうえに変な誤解をされることになった・・・

しかもその後はビアンキが来て獄寺君が保健室に運ばれたし、ついて行つた先生の代わりにリボーンが教えることになつて大変なことになつたし・・・

今日もオレついでね～

そういうえば、放課後に雲雀さんを見かけたけど何か機嫌かよみがうに見えたな・・・

なんでだろ?つへ

標的17 雲雀の意外とツナの不幸（後書き）

もしかして雲雀さんって麗のこと・・・

この後2人の関係はどうなっていくのか！？

相変わらずのツナは麗に認められる田が来るのか！？

次回もお楽しみくださいーー！

標的18 ランキングフウ太の話

sideフウ太

ぼくは『ランキングフウ太』って呼ばれる情報やなんだ

ぼくの持っているランキングブックを狙っている悪いやつらから逃げているんだけど、途中学校でツナ兄にあってかくまつてもうつこになつた

ツナ兄は頼まれたら断れない人ランキングで堂々の1位なんだよ！

それに、野望のないボスランキングも1位だからランキングブックをとられる心配もないんだ

ぼくを追っているトッドファミリーは狂暴性ランキング7位のファミリーなんだけどツナ兄大丈夫かな？

不安だつたけどツナ兄つしてごいんだよ！

ぼくが捕まりそうになつたときトッドファミリーの人たちを倒してくれたんだ！戦闘ランキング最下位のツナ兄がだよ！

ぼくのランキングが外れたのは初めてだつたな・・・やつぱツナ兄つてすごいんだな

ツナ兄のそばでもつと感動したいから並盛町にいることこしたよ！

si de 沢田 綱吉

フウ太がオレの家に来てから三日

学校へ来ては声をかけてくるじじいからか現れるし・・・

正直オレに恨みでもあるのかって聞きたくなるぐらいだよ

「ディーノ「よお、ツナー！」

「ディーノさんの声がしたからズアをみるとトトロさんの部下がゾ

ロゾロと入つてきていった。何回見てもこの光景にはなれないな……

ディーノ「元氣にしてたか?んつ、こいつは正真正銘の「ランкиングフウ太だ。

いやさがそーつたつてしつぱすらつかめねー星の王子様だ。」

フウ太「こんにちは、跳ね馬ディーノ」

ディーノ「よろしくな。それにしてもツナ、こいつに慕われるとはいしたもんだぜ」

子どもに好かれることがそんなにすごいことなのかな?

ディーノ「フウ太、早速だが商談だ。あるマフィアのランкиングを売つてほしい」

え~!~!~ディーノさんがフウ太に頼みごと!~!

もしかしてフウ太ってとってもすごいマフィアとか……

しかもディーノさん、情報料とかつて言つてフウ太にケースいっぴいのお金を渡してくるし!

フウ太「お金はいらない。ディーノは住民を大事にしているランキング

堂々の1位だからね。そーゆーボスは好きさ。それに、ツナ兄の

兄貴分つてことはほくの兄貴分でもあるだろ？？」

兄は

ディーノ「！オレはいい弟分を持つて幸せだぜ。感謝するぜフウ太、ツナ！」

フウ太「はい、これランキングの「ペー」ね」

ディーノ「サンキュー。急いでるんでまたな」

それにもしてもフウ太がディーノさんに「目おかれるほじす」いやつだとほ思わなかつた。そーだよな、考えてみたらランキング100発100中なんだもんな

side フウ太

ツナ兄のところに来てから毎日が楽しいな

そういえば、この前ディーノ兄がツナ兄の家に来てたなあ・・・仲がいいのかな?

ツナ兄の家ではハプニングがいっぱいなんだよ

たとえばどつても苦しい毒殺ランкиング128技中3位のビアンキ姉のポイズンクッキングで作られたクラッカーを食べさせられたり雪合戦ではイーピンが爆発したりいろいろ大変なんだ

でも、京子姉やハル姉、ツナ兄のお母さんやたくさんの人たちとはしゃいで楽しいよ

あ・・・雨が降ってきた

ゞゞく、翻つて苦手なんだよね・・・

ランキングがでたらめになっちゃう

そういうことでもたね！

sideディーノ

ランキングフウ太

かわいかつたな・・・

それにしてもツナのやつフウ太に好かれるなんて・・・つらやましいな

獄寺「跳ね馬じゃないですか」

ディーノ「ああ、獄寺か。そういえば今、ツナの家にランキングフウ太が来てるぜ」

獄寺「あのランキングフウ太ですか?今すぐ10代目の家について来ます!」

最近の若者は元気だな

そろそろ帰つて早く問題を済ませなれば・・・

この後ツナの家では大変なことになっていた

ツナの周りのたくさんのマフィア関係者が集まる中、かげではある人物が動き始めていた

そして半年がたつた

その間にもツナには様々なハプニングやトラブルがあつた。アルコバレーノやほかのファミリーなどたくさんの人があつてたがいまだにボスを継ぐ気はなかつた

一方麗はというとなぜか雲雀との交流が多くなつてきている

ツナとはクラスメイトとして話すようになつてたが麗も雪の守護者を引き受けたつもりは一切なかつた

そんな中、並盛町ではある不思議な事件が起つてた

標的1-8 ランキングハウ太の話（後書き）

このまま書き続けるといつ戦闘シーンに入るか分からないので少し原作をとばして書いてこいつと思います

皆さまの好きなシーンをとばしてこいたら申し訳ありません（．．．）

しかし、どのシーンも面白くなるよう頑張つてこります！．．．

標的19 連続暴行事件（前書き）

2学期が始まりテンションの下がっている私ですが小説のほうは頑張つた行きたいと思います！！

標的19 連続暴行事件

s.i.d.e 雪風麗

私が転入してきてから10ヶ月

意外と早いものだなと思う

沢田とは友達として普通に話すようになったけれどボスとしては認めていない

それよりも、私はこの状況が気に入らない。今に始まつたことではないが納得がいかないんだよね・・・

麗「雲雀、何で私が手伝わなきやいけないの？」

私は雲雀と一緒に不良（雲雀いわく並盛の風紀を乱す人）を退治？していた

雲雀「あたりまえじゃないか。君は風紀委員「じゃないから」なんだから

一応、即否定の言葉を入れたが聞いてはいないだろう

雲雀は「」
「力月私を風紀委員の仕事に誘つてくれる（迷惑なのだけれど……）

もちろん、向こうには悪気はないみたいだけどほほ毎日のように誘つてくるからとさき逃げる。でも次の日にさつぱつたからつて噛み殺すとか言つてくるから逃げるのはあきらめた

雲雀「君もストレス発散になるだろ？」

麗「ん~、若干スッキリはするけど……つてまさか雲雀はストレス発散のために噛み殺すとかつて言つて襲うのか！？」

雲雀「並盛の風紀を乱されることがぼくのストレスになるんだ。その原因を噛み殺して何が悪いんだい？」

麗「雲雀に質問した私がバカでした」

あいつの思考回路はどうなつていいのか知りたいよ……

風紀委員「うう・・・ぐはう・・・」

じやつ

風紀委員「うう・・・」

? 「よえーよえー。風紀委員恐るるに足らぬー。」

2人の男の前に風紀委員が1人ボロボロになつて倒れていた

風紀委員「貴様ら・・・何者だ・・・」

? 「んあー? 遠征試合」やつてきた隣町ボーアイズ?」

? 「それつまんないよ。早く済ましてよ犬」^{けん}

? 「こいつ何本だっけか? ちょっとくら頂いてくぴょーん」

そう言って1人がポケットからペンチをとりだした

風紀委員「な、何をする気だ！？」

? 「恨まないでね。上の命令だから」

風紀委員「や、やめろ・・・」

？「ほい」

ツナ母「並中大丈夫なの? また襲われたらしいじゃない」

ツナ「何それ?」

オレは起きてからいきなり母さんに言われてキヨトンとしてしまった

リボーン「」この土田で並盛中の風紀委員8人が重傷で発見されたんだぞ。

やられた奴はなぜか歯を抜かれてるんだ。全部抜かれた奴もいたらしいな」

ツナ「え～～～…マジで…？な・・・何でこりなん」と呟くんだ？

リボーン「セーな」

ツナ母「ねーゾナ、護身用に格闘技でも習つたら？」

ツナ「なんでそーなるんだよ…」

つたく母さんはすぐ何かをさせたがるんだから・・・

それに不良同士のけんかなんだから俺には関係ないよ

それについても風紀委員ばかり襲つて何の意味があるんだら？

疑問が残りながらオレは登校していた

リボーンに原子ちゃんのお兄さんからボクシングを畠山に教わったけど、絶対にスバルタで殺される

そんな会話をしていたといひに風紀委員の姿が田に入ってきた

よく見たうあたりに風紀委員がいる

ジナ「なあ、リボーン。どうして風紀委員がこんなところにいるんだ
だらう？」

リボーン「やつは不良同士のけんかなのかな？」

ジナ「やつは不良同士のけんかなのかな？」

雲雀「違うよ

ジナ「雲雀さん……」

な、何で雲雀さんか」「なんといひにいるんだーー？」

リボーン「おおおー！」

ツナ「お、オレはただ普通に登校していただけで・・・」

雲雀「身に覚えのないイタズラだよ。

もちろん、降りかかる火の粉は元から断つけどね」

や、やっぱ雲雀さんはコレ

縁へたなびく並盛の～

ん?なんか歌のようなものが聞こえる・・・

大なく小なく並へがいい～

よく聞いてみるとうちの校歌だ

ピッ

ピッ?

いつたいどこから・・・・・・・!!

雲雀さんをみると携帯を出して話していた

ま、まさか・・・今のって雲雀さんの着メロ〜!?

もつこりんな空氣嫌だー早く行こひー・・・

ツナ「じゃあ、失礼します」

雲雀「君の知り合いじゃなかつたつけ。笛川了平・・・やられたよ」

ツナ「・・・!」

お兄さんがやられた!?

は、早く病院に行かないと!!--

沢田綱吉・・・行つたか

さてと、ぼくはさつと仕事を済ませよつ

雲雀「麗、行くよ」

麗「つたぐ、人使いが荒いな・・・そんなにピリピリしなくていい
でしょ」

雲雀「並盛で勝手な」としてたんだ。それなりの罰を取けてもら
わないとね」

麗「はいはい、分かったよ。それじゃあ行きますか・・・敵陣へ」

雲雀「君が仕切らないでよ」

麗「はいはい」

雲雀「じゃあ、いこいが」

並盛の風紀を乱すやつは誰であろうと許せない

必ず噛み殺してあげる

こうして、麗と雲雀は今起じてこる事件の犯人のところへ行くことになった

標的19 連続暴行事件（後書き）

次回、麗と靈雀はあいつに会つのか！？

裏で動きだしだ何者かがツナたちボンゴレファミリーに迫る。-

やつと戦闘シーンに入れるかも・・・

100まで来ることとも長かったです

標的20 篠川了平襲撃

s i d e 篠川了平

今俺はわけあつて並盛中央病院に入院している

ツナ「お兄さん！大丈夫ですか！？」

了平「おー沢田、早いな。情けないがこのままだ

沢田がここに来たつていう」とはそういう京子も来るのか・・・
沢田も心配性なところがあるからな、少し大げさなのだがこのへり
いのケガどうつてことない！――

リボーン「ケガの具合はどうだ？」

了平「骨を6本折られて7ヶ所にヒビ、そして・・・。
見ろ、歯を6本もつていかれた・・・」

ツナ「ああ！」

了平「といつてもボクシングで折つてもともとむさし歯なのだが」

ツナ（笑つていいのやら・・・）

反応が薄いな・・・氣を遣わせてしまったか？

まあ、もつていかれたのが歯でよかつたな。しかしあの男・・・

リボーン「襲つてきたやつの顔を見てるか？」

了平「ん？見てるぞ。あの男、油断していたといえ恐ろしく強い男
だった」

ツナ「犯人見てるんですか！？」

了平「ああ。奴は俺の名を知つていた。そしてあの制服は隣町の黒
曜中のものだ」

ツナ「ええ～！…中学生ですか？」

うむ。沢田が驚くのも無理はない

あの男にあつたのは朝のロードワークをしていときたつた・・・

ロードワークをバカにするなよ。朝のロードワークは極限のパワー
がみなぎってきてなとても気持ちがいいんだぞ！・！

まあ、その途中だつた。いきなり声をかけられてな

黒曜中・犬「ねーねー、あんた笠川了平？」

黒曜中の制服を見て、てつきり我がボクシング部に入部するつもり
だつたが間違えて他校に入学してしまつたあわてん坊だと思い込んでしまつたのだ

他校でも俺はかまわんから」いつ言つたんだ

了平「ボクシングへの愛さえあれば入部大歓迎だ！」

と。そしたら

犬「じゃーそれでいいや。オレを倒したれ入部してあげる」

嬉しそうに見えたんだがな、オレを倒してからどこかへ行つてしまつた

それにしても強かつた。あの男のパンチ……

了平「我が部に欲しかつたーー！」

「ナ、『こんなこともボクシングの話ですかー?』」

おお、沢田ナイスつつこみだ

了平「話は変わるが京子にこのことを正直に話していい。
あこいつすぐ心配するんでな、口裏を含わせといてくれ」

ツナ「えつ・・・」

もつ京子には心配させぬと誓つたのだ。絶対にばれてはいけない

京子「お兄ちゃん！…どうして銭湯の煙突なんて盗ったの！？」

早速、あわてた京子がオレの病室に入ってきた

煙突に登ついたら足を滑らせネンザしたと言つてある。京子は少し納得していながら最後は

京子「でも、生きててよかつた」

と泣きながら呟つてくれた

本当に京子は心配性だな・・・

お兄さんと京子ちゃんを2人つめさせたためにオレは病院を出した

それにして何でお兄さんがやられてるんだー!?

襲われてゐるのは風紀委員のさすじゃなかつたのかー??

オレはパークつていた

リボーン「パークつてゐるのはツナだけじゃねーな」

ツナ「! ! !」

周りを見てみると病院には並盛中の生徒がたくさんいた

ツナ「何で」んなに並中生がいるのーー?」

リボーン「おそらく、襲われてゐるのは並盛中の生徒だけだつて」と
だな。

しかも、無差別にだ」

ツナ「何でそんな恐ろしこじとーー?」

草壁「では、委員長の姿が見えないのだな」

明日は我が身だと思つてゐるヒセに風紀委員副委員長の草壁さんの

声がした

委員長つてたしか雲雀さんのことだよね？でも姿が見当たらぬいつてことは・・・まさか、そんなわけないよ・・・たぶん

風紀委員「ええ、いつものように敵の尻尾をつかんだかと思われます。

「それで犯人側の壊滅は時間の問題です」

草壁「そうか」

え・・・今雲雀さんが敵を倒しに行つたつて言つてたよな

つてことはもつ心配ないんじやん！――

雲雀ちゃんと回り中学生でよかつた～！

リボーン（やう簡単には行かないぜ・・・）

sideリボーン

今並盛では並中生のみ襲われるという奇妙な事件が起きている

そんな中、ア平の見舞いに行って病室を出てからレオンの尻尾が切
れた

レオンの尻尾が切れるといつことは何か不吉なことが起る

医師「そこー、どきなわーー」

突然言われて振り返つてみると急患が入つたようだ

よく見てみると見覚えのある奴だな・・・確かあいつは

ツナ「く、草壁さん！？」

風紀委員副委員長か

今まで襲われた奴は全員歯を抜かれていた。しかも徐々に本数が減つていて。もしかして・・・

ツナ「ちよつ、リボーン何してるんだよ」

オレは草壁の口の中を調べていた

そして予想通り歯を5本抜かれていた。これで確信が持てたぞ

ツナ「おい、リボーン！」

リボーン「ケンカ売られてんのはツナ、お前だぞ」

標的20 篠川ア平襲撃（後書き）

最近体育大会の練習でバテている音無ですが今回も何とか書き終えることができました・・・

さて今回はア平中心に書いてはみたもののやっぱ難しいです

キャラの気持ちになつて書いてみてはいるのですが口調とか性格を考えるとおかしいところがあるかも・・・（すみません（^_^））

標題2-1 黒耀フンド（記書き）

今日は学校の体育祭があつてへトへトです・・・

受験勉強も忙しくなつてきましたし生徒会の仕事はたまつてゐるし・・・

ああああ～と叫びたい気持ちの面無です

s.i.d.e 沢田綱吉

リボーン「ケンカ売られてんのはツナ、お前だぞ」「

突然リボーンにそんなことを言われた

狙われてるのがオレー? まさかそんなわけないじゃないか

ツナ「ケンカ売られてるってどうって意味だよ!」

リボーン「こいつを見てみ!」

やつはつて渡してきたのは何かが書いてある紙だつた

ツナ「並盛中のケンカの強さ? ランキング? これがどうかしたの?」

リボーン「おめーは鈍いな。そのランキングをよく見てみろ。襲われたメンツと

順番が一致してるんだ。奴らは歯でカウントダウンしてやがる」

確かにこのランキングと襲われた人は一致していた

でもこのランキングって・・・

ツナ「フウ太のランキングみたいじゃないか・・・」

リボーン「見たいじゃなくてそつなんだ」

ツナ「いつたいどうなつてるんだ・・・?」

リボーン「俺たちマフィアには『沈黙の掟』^{オルメタ}というのがある。組織の秘密を絶対に

外部に漏らさないという掟だ。フウ太のランキングは業界全体の

最高機密なんだぞ。一般の人間が知るわけがない」

そんなにすごいランキングなんだ・・・

5位の草壁さんが襲われたってことは次は4位の人襲われることになるんだ

え~と、4位の人は・・・

リボーン「つまりこのランキングを入手できるのは・・・」

ツナ「あつーーー！」

ランキングの4位の人を見つけたときオレは驚きでリボーンの言つていることが聞こえなくなつた

まさか、4位があの人だなんて・・・

リボーン「（気付いたか）ツナ、お前が行け。オレは気になることを調べる」

ツナ「オレ一人！？」

今私は雲雀と一緒に連続襲撃事件の犯人のアジトへと向かっていた
どういいう手を使って見つけたのかは分かんないけど雲雀がついて来
いつて言うから仕方なくついて行っている

麗「ねえ雲雀、いつたい犯人は誰なの？」

雲雀「まあ、着いてからの楽しみだよ」

この通り雲雀は犯人を全く教えてくれない

麗「犯人教えてくれないんだつたら帰つていい？」

雲雀「帰つてもいいけどやうしたるの並盛で生きていいかないと思つたほうがいいよ」

(「えへどんだけ権力あるんだよ」)つ

帰つとされば殺されただからやめておいつ・・・

それにもどりまでも行くんだろつ? もう隣町まで来ていたが一向にアジトといえるものが見えてこない

それからじぱり歩いてると廃墟らしき建物が見えた

麗「敵のアジトつけてるへ・」

雲雀「そつだよ。たあ、行いつか

麗「行いつかつて私たち一人だけで乗り込む氣! ? 無謀にもほどがあるー・」

敵は並中の強じやつらをことも簡単に倒していく

やられた奴らを見ればわかる・・・敵は相当であるー・

こへり雲雀が並中最強だからといって敵の正体も知らず乗り込むな

んて馬鹿げてる

そう思つてゐる間に雲雀はスタスタと廃墟へ向かつて歩いて行つて
いた

麗「ひよつ、まつてみー話を聞けつてー」

雲雀「・・・・・」

麗「無視ですか・・・」

まあ、雲雀が人の言つ「」とを聞くわけがないか・・・

いつもあいつには振り回されるな。あいつに付き合つてての私もバカ
だよな・・・

さつきから麗がごたじたつるさいな

まあ、いいか

麗「ちよつと待つてよー。」

雲雀「君が遅いからだよ。早くしなよ」

ぼくたちは閉鎖した黒曜センターまで来ている

目的はもちらん連続襲撃事件の犯人を噛み殺すためだ

麗はさつきから相手の正体がわからないのに無謀だとか言つてるけど相手がだれであろうと僕には関係ないね。結果は目に見えているのだから

雲雀「ここが入り口か・・・」

麗「もひ、やるんだつたらわざと殺つてよね

麗は帰るのをあきらめたようだ

雲雀「行くよ

黒曜センターの中の階段はほとんど壊されていていた

残っている階段はおそらくひとつだつた

麗・雲雀「・・・！」

黒曜生「貴様ら何者だ！」

歩いていたらいきなり声をかけられた

黒曜生か。相手はおそらく30人ほど・・・まあ、何人いても関係ないけどね

s i d e 黒曜生

俺たちが黒曜ランドの見回りをしていた時だった

2人の男女の声が聞こえた

黒曜生「侵入者だ。相手は並中の男女2人」

黒曜生「どうする?」

黒曜生「迷い込んだものかもしれない。確かめよう

話し合いの結果、確認するために声をかけに行つた

黒曜生「貴様ら何者だ！」

2人が一瞬だけびっくりした顔をした。少しきつく言いすぎたか

無関係のものかと思ったとき男のほうが言つた

雲雀「向ひから出てくるとはね。手間が省けた」

黒曜生「・・・・！」

「こつらは敵か！？」

麗「めんどくさいことになつてきた・・・」

「こつ」とは女のほうもか！

女もいるからつて油断した

黒曜生「侵入者発見！直ちに排除せよ！！」

俺たちは35人、相手は2人。しかも1人は女だ
すぐに終わらせてやる

黒曜生「男のほうに25人、女のほうに10人むかえ！！」

素早く指示を出した

あつという間に2人を囲い、勝つたも同然だった

麗「女だからってなめられたものね。まあ、楽だからいいか」
そんなことを言つてゐる余裕はないぞ

俺たちは強い。女一人でどうこうできる問題じゃない

雲雀「そもそも、35人でぼくたちに挑もうつていうのが間違つて
るね。

しかも、草食動物ばかりじゃないか。僕は興味ないね」

黒曜生「おとなしく聞いていれば・・・俺たちをなめるなよ！！」

一斉に襲いかかった

皆、ナイフや金属バットなどの武器を持つていた

しかし、相手はひるむ様子が一切なかつた

それどころか2人は笑っていた。戦いが楽しいと思つかのようだ

相手は35人。私の相手をしてくれるのは10人か・・・

なめられたものね・・・

戦いは別に嫌いじゃない。だけど無意味な戦いはしない
もう仲間が傷つくところは見たくない。もう仲間を失いたくない
でも戦う前のあの緊張感。勝利した時の気分は自分でも驚くぐらい
に最高だ

だから、雲雀にいろいろと連れまわされてるけどいやではなかつた

黒曜生「かかれつ！！」

1人の掛け声で10人が一斉に襲いかかってきた

向こうはナイフや金属バットを持っています。私の武器はなし

黒曜生「女は何も持つてない！-さあさあ済ませやべ！」

女だからなめられるのも当然だけどなんかむかつくな

軽い傷程度で済ましてあげようと思つてたけどやめた。本気で殺るつ

黒曜生「ううああーー！」

一斉に私をめがけて振りかぶってきた

私は低く姿勢をとりバットが振り下ろされる瞬間飛び上がった

黒曜生の頭の高さまでジャンプした

黒曜生「・・・！」

黒曜生は何が起きたのか分からずただ突っ立っていた

麗「女だからってなめてんじゃねーよ」

空中で体をひねりながら黒曜生の顔めがけて蹴りをかました

7人にヒットし気絶させた

変な音がした奴もいたけどまあいいか

黒曜生「この女、強いぞ。おい！男のほうはどうだーー！」

私の強さが想像以上だったのかかなり焦っている様子だ

そんなによそ見している暇があつたらさうとかかってくれればいいの

もつづけの体制は整つてゐるが、この

麗「少しばら自分の身の心配をしたらう? あんた達あと3人だよ

黒曜生「…………やめろ…………」

ガニツ バキツ ボキツ ドサドサツ

残りの3人は倒した黒曜生のバットを借りてあつさりと倒した

全く張り合ひのないやつら……ウォーミングアップにもなんないや

まあ、こつこつは完了した

麗「雲雀へそつちほどいへ」

雲雀「こんな奴らゴミ虫以下だね。分かつてることをいちいち聞かないでくれる?」

麗「だつて、雲雀のほうが私より人数多かつたし」

少しふざけた調子で行つてみる

雲雀「麗、ほくの」となめてない?」

麗「そんなことないよ~だつて雲雀すゞいし」

実際、25人いた黒曜生が現在目の前で屍の山を作つてゐるし
(全部雲雀がしたんだけどね・・・)

でも、雲雀のムツとした顔つて可愛いな・・・
けつじうこじるの楽しいかも

雲雀「麗、帰つたら覚悟しててね」

ちよつと・・・ってゆうかかなり怖いけど

side 沢田綱吉

びうじょう・・・

まさか、4位があの人だったなんて

急いで知らせないと

オレは並盛中央病院を出てから急いで並中へ向かっていた

フウ太のランキングにそつて襲われているのだとしたら次の標的は
君なんだ！！

どうか無事でいて・・・・・

獄寺君！！

標的2-1 黒曜フンド（後書き）

戦闘シーンいかがだったでしょうか？

やつぱりもつと詳しく述べたほうがよかつたのかな・・・

「意見があればぜひお願いします！！

s i d e 雲雀恭弥

ぼくは麗と黒曜ランドに来ている

途中で黒曜生らしき人たちがいたが、あんな群れで動かないと何もできぬ奴らは相手にするほどじやなかつた

その後も進んでいったがこの黒曜ランドには各階に階段が一つずつしかなかつた

相手もバカではないらしい

でもこのぼくを怒らせたのだから噛み殺されるのは確実だね

さて、どうやって噛み殺そうか・・・

あつさり殺してしまうのはつまらない。じつくり痛めつけて恐怖をたっぷり味あわせよう

れいあから雲雀のやつ黙つてばっかなんだよな・・・

もしかして相手がさつきみたいな奴だと思つて拍子抜けしてるとか

麗「ねえ、雲雀。れいきの相手だけあこひはたぶん黒曜生の中で一番
弱こじつりだよ。あこひのボスはもつと強い。しかもかなり
の強さだ」

雲雀「・・・・・」

む、無視・・・・?

麗「雲雀、聞こてる?」

雲雀「そんなことわかんないよ」

何だ聞いてたのか

そつ言いながらスタスターと歩いて行く雲雀

この黒曜ランダムな階段が各階に一つずつしかない

つまり、敵が現れるところを予測しやすいわけだ

雲雀も、もつ少し用心して行つてもいいの

麗「そういうえば、敵のボスがどこにいるかわかつてゐるの？」

雲雀「知らない

麗「えつ……？」

知らないうち、今までどこに向かって進んでたんだよ

上の階にどんどん進んでいくからつきり居場所知つてゐるのかと思つてた……

でも、敵の居場所も分からずに進む度胸だけは認めよう……って言つてゐる場合じゃない……

やつぱつ雲雀は無謀あざわら

雲雀「……だね」

麗「えつ・・・何が?」

いきなり立ち止った雲雀の前には扉があった

麗「もしかして……」

雲雀「連續暴行事件の主犯がいるよ」

なんだかんだ言つて雲雀のやつ敵の居場所知つてるんじゃんかよ……

つわづわめ

麗「……めんなれー」

心の中で思つたはづなの雲雀のやつ私をヒヒヒヒヤヤがつた

あこつは心の中で読めるのかー?~

つい謝つてしまつたじゃん！

雲雀「じゃあ、行くよ」

麗「オッケー」

こうして私たちは敵と対面することになった

この後信じられない結果が待つていてることを知らずに

オレは今並盛中にいる

しかし、この登校率の少なさは異常だ。クラスの半分も来ちゃいねー

それより、10代目が登校していないのが気になる

何かあつたのだろうか・・・

あ・・・携帯の充電切れた

10代目も心配だし帰るか

そう思い席を立つた

途中、先生にひきとめられたが無視した

商店街まで来たのはいいが何をしようか

獄寺「とりあえずメシでも食うか」

そう思い所持金を見たところ持っていたのは・・・

獄寺「ゲツ、65円・・・」

金もないのかよ

? 「並盛中学2・A出席番号8番・・・獄寺隼人
早く済まそう。汗・・・かきたくないんだ」

何だこいつ・・・

いきなり現れてオレの名前言いやがって、何か用でもあんのかよ

獄寺「んだてめーは？」

千種「黒曜中2年
柿本千種。かきもとちくさお前を壊しに来た」

はあ

つたぐ、何でこいつ毎日他校の不良にからまれんだか
けつじう地味に生きてんのに・・・しかたない

獄寺「わーった、きやがれ。売られたケンカは買う主義だ」

不良「おつ、中坊同士のケンカだケンカ」

不良「おもしれえじやん」

周りにいた不良共が集まってきた

千種「・・・見せものじゃないんで」

シユツ プシャーツ

な、何だ！？

今何が起こうた！？

あの千種つつう奴が腕を動かしたと思つたら不良共の頭に針がいくつも刺さっていた

何者だこいつ！？

獄寺「テメー何しやがつた！？！」

千種「いやぐよ・・・めんべい」

ゾクツ・・・

何だこの寒氣・・・」といつ、やばい！

また千種の腕が動く

反射的に横へ避ける

・・・！

ほほにかすり傷ができていた。いつたいあいつの武器は何なんだ！？

「」はひとまず様子を見るか

千種とは反対方向に向かつて走り出す

角を曲がった刹那ダイナマイトを大量に千種へ向かつて投げる。そして俺は物陰に身を隠した

やはり千種の腕が動く。そして、ダイナマイトの導火線が次々と切れていった

導火線を切つたと思われるものがそのままオレが身を隠していたところまで来た

(ヨーヨーー?)

それはかなりの速さで回転しているヨーヨーだった

ヨーヨーには無数の穴が開いていた

(もしかしてあの不良共に刺さった針はここから……)

ビッ

そう思った瞬間ヨーヨーから無数の針が出てきた

後ろの建物が破壊される

その衝撃でオレは道路にはじき出された

獄寺「チツ・・・」

「こいつ・・・ただの中坊どじろじやねえ

殺氣といい戦い方といい本物の殺し屋だ!!

sideリボーン

オレは公衆電話でトヨーノと話しおしていた

リボーン「助かるぞディーノ。もし、問題の連中と同一人物なら奴らが妙な手をうつてくるのも納得できるな。
脱獄したばかりでこちらの情報を持つてねーんだからな」

これから大変なことになるぞ

わて、どうする・・・・・・ツナ!!

標的22 獄寺隼人襲撃（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました（Ｔ－Ｔ）

さて、雲雀と麗はこの後どうなるんでしょうかねえ

それは次回のお楽しみということです・・・

標的23 黒曜生の目的

s.i.d.e 沢田綱吉

どりこいるんだよ、獄寺君！――

学校に行つても帰つたつてこりし携帯に電話してもつながらないし・・・

無事なんだよな！？

女子高生A 「あつ、並中生だ！」

そのとおり、通りすがりの女子高生の声がした

女子高生B 「無視無視。近寄らないほうがいいよ

女子高生A 「だよね。変に巻き込まれたくないし。

わつきも商店街で見た？」

女子高生B 「なんか並中の子、黒曜の子とケンカしてたんでしょ？」

まさか、それって獄寺君のことじゃ……急がないと…

オレは獄寺君を探しに走りだした

side 獄寺隼人

獄寺「黒曜中だ……すつとぼけてんじやねーぞ」

オレは、並盛商店街で黒曜中の柿本千種というやつと戦っている

あいつの戦い方・殺氣は本物の殺し屋だった

ただの中学生じゃねえ

獄寺「てめえどこのファミリーのもんだ」

千種「やつと当たりが出た・・・」

当たり！？「つたいたい何のことだ？」

こいつの目的はいつたいたい何なんだ

千種「お前にはファミリーの構成、ボスの正体、洗いざらしはいて
もひひ！」

獄寺「なにー？」

狙いは10代目か！？

千種のパーパーがオレに向かって伸びてきた

後ろへ飛びギリギリで針を避ける

10代目が狙いだつてなじみつてーに食い止めねーとー。

獄寺「2倍ボム」

通常の一倍のダイナマイトを千種に向かつて投げる
しかしヨーヨーの糸を使って導火線がすべて切られた
そのままヨーヨーは獄寺の左右へと向かつて伸びていく

獄寺「くそつ・・・はさまれた!」

オレのスピードじゃよけきれねえ

できればこの技は使いたくなかったな・・・

そつ思いながら腰についていた小さなダイナマイトを取り出す

獄寺「こぐらチビボムだからこよ・・・」

チビボムに火をつけ自分のすぐ後ろへと投げる

千種「!?」

チビボムが爆発し爆風を利用して針から逃れる

獄寺「いてーんだよー。」

やつぱこの技はいてーな

この勢いを利用して千種へと殴りかかる

獄寺「くらいな

しかし千種は軽々とよける

千種「おそい

獄寺「くそつ！まだだ！一倍ボムーーー！」

千種「芸のないやつ・・・」

ヨーヨーで導火線を切っていく

しかし、気付いた時にはいくつかのダイナマイトが千種のそばまで
きていた

千種（距離の計算はあつていたはず・・・じつしてー？）

顔のすぐそばでダイナマイトが爆発する

千種がよろめき顔や肩から血が噴き出す

獄寺「へへへっ、ザマあねーな。テメーは簡単な遠距離法のトリックに引っかかったのさ。オレが一倍ボムのかけ声とともに通常のダイナマイトを放ったとき

すでに放っていたチビボムが通常のダイナマイトと同じ大きさに見えるほど

お前に接近してたのさ。ボンゴレなめんじやねー。果てな

千種に向かってダイナマイトを投げた

千種「ー..」

ドカ　　ドカツ　　ドカーン

まあ、けつこうやまかつたが終わつたぜ

同時刻・黒曜ランドで雲雀と麗は首謀者と対面していた

廃墟の中の扉の前に僕は立っている。おそれへいの中には首謀者がいるだろ？

それで、どうせひとつ噛み殺さうか……

そつ思いながら扉を開けた

雲雀「やあ

首謀者「よく来ましたね」

これから戦う者どうじとは思えない会話だった

雲雀「ずいぶん探したよ」

麗「うそつけ……」止まらず歩いてきたくせに

雲雀「まず麗から噛み殺そつか」

麗「いや、遠慮しないままで

「元気

雲雀「君がいたずらの首謀者？」

首謀者「クフフ、そんなところですかね」

なんともいえない空気が漂う

私は部屋に入ったときの空気に違和感を覚えていた
この空気、相手は落ち着いていた。いや、落ち着きすぎていた

あきらかに戦い慣れしている

首謀者「クフフ」

麗「・・・！」

首謀者が顔をあげたとき私は絶句した

首謀者の顔には見覚えがあった

過去のトラウマからか足が震える

あいつにだけは、六道骸だけには会いたくなかったのに！

標的23 黒曜生の目的（後書き）

次回はやっと雲雀と骸の戦闘シーンに入れそうです

麗の過去についてはいずれ書こうと思つてはいますがタイミングが・

・

とにかく、精一杯がんばりますーー！

標的24 六道骸

s.i.d.e 雲雀恭弥

雲雀「君がいたずらの首謀者？」

ぼくは田の前に座っている男に問いかけた

骸「クフフ・・・そんなところですかね。そして君の街の新しい秩序」

雲雀「寝ぼけてるの？並盛に2つの秩序はいらない」

骸「まったく同感です。ぼくがなるから君はいらっしゃない」

何を言っているのかなこいつ

君の願いは永遠にかなうことはないのこ・・・

」こつこつぼくのストレス発散のために協力してもうわなこと

制服から仕込みトンファーを出す

雲雀「君はここで噛み殺す」

さあ、楽しいゲームの始まりだ

しかし、骸は動く気配がない

雲雀「座つたまま死にたいの？」

骸「クフフ、面白い」とを言こますね。立つ必要がないから座つて
いるのですよ」

いちいちむかつく奴だな

わざわざから麗は一皿もしゃべらない。少し足が震えてこるよつて思
える

使い物にならないなさい。放つておいつ

雲雀「君とはもつ口を利かない」

骸「どーぞお好きに。ただ、今喋つとかないと一度と口がきけなく
なつますよ」

雲雀「……」

なんだ・・・?

いきなり寒気がしてきた

骸「んー? 汗が噴き出しへきましたがどうかなさいましたか?」

雲雀「黙れ」

骸「せつかく心配してあげているのに。ほら、しっかりしてくださいよ。僕はひいちですよ」

雲雀「……」

足元がふりつく。一体どういふことだー? ?

くそつ、意識が・・・

骸「海外から取り寄せてみたんですよ。クフフ、本当に苦手なんですね」

麗「・・・！」

雲雀「・・・！」

骸「桜」

室内が明るくなりそこに見えたのは大量の桜だった

私は雲雀とともに黒曜ランドへと向かい首謀者がいる部屋へと入った

そこにいたのは私が一番会いたくない人物であった

どうしてここに六道骸がいる。あいつは捕えられていたはずじゃないのか！？

骸「クフフ、本当に苦手なんですね・・・桜」

雲雀「・・・」

しまった！

ボーとしてしまっていた

気付いた時には部屋一面に桜が咲いていた

やばい！！たしか雲雀は桜に弱かつたはず

あのクソ医者に「サクラクラ病」をかけられたんだった

しかし、なぜいきなり桜が・・・

雲雀「くそつ・・・」

麗「雲雀！大丈夫なの…？」

雲雀はふりついても立ちはだられない状態だ

片膝をついていて呼吸が荒い

骸「クフフ、やつれまでの威勢はビリしましたか？」

麗「くわつ。何で！」

雲雀「君たちは知り合いか…？」

麗「雲雀には関係ないことだ。口を出さないでもらいたい。

それに今、雲雀は動ける状態じやないでしょ」

雲雀「ふんつ…えらそ…」

骸「おや？見たことのある顔と思つていたら…クフフ、そういう」とですか

「元気にしてこましたか？雪風さん」

麗「うるせー…」

「あの監獄から抜け出した…なぜ貴様

が「うーん……？」

骸「クフフ、あのような場所抜け出すことは容易なことですよ」

「の桜、どうにかして消すことはできなにだろ？ か・・・

私の能力を使つてもいいが今ここで使つと弱つてている雲雀が耐えきれるかどうかわからない。もし耐えきれなかつたら命が危ない

あの桜が出てきでから何か違和感がある・・・何でだ？

くわづ・・・わからない

骸「わて、そんなひからも仕掛けましょがね。心配しなくていいですよ。

今ここで命をとるよつなことはしません。順番どおりにしないと面白くない。

やうやう、君たちがボンゴレにひいて何か知つていますか？」

麗「そんなこと知るか！」

骸「そうですか。でしたら君たちには時が来るまでおとなしくじつもりこます」

麗
「

この違和感の正体、分かつたぞ

麗「雲雀、惑わされるな。この桜は幻術だ！ 実際には存在しない！」

骸「ほう・・・よく見破りましたね。でも遅いですよ」

ドカツ

雲雀「・・・・・」

雲雀が部屋の端へとけられる

麗「しまつた。おのれ、六道。どれだけ私を苦しめれば氣が済む！

骸「やつしからのやつですね。少し静かになつてもうこまつよ」

麗「……いやだ。や、やめ……あ、あああああ……。」

いきなり、麗が耳をふりき叫びだす

雲雀「麗……？」

麗「いやだ！」なんのまゝ見たくない……やめてえ――――――」

力尽きたのか床に倒れてグッタリとしている

雲雀「麗に何をした」

骸「やつと静かになりましたね。クフフ、次は君の番ですよ」

やつと雪風麗が静かになつた

後はあの男だけ

骸「さて、終わらせましょうか」

骸は雲雀を殴り、蹴り続けた。血まみれになるまで

雲雀の意識が途切れかけてきた

骸「なぜ桜に弱いことを知つているのかつていう顔ですね。もしかして桜が なければとか思つています? 君みたいなレベルは何人も見てきましたよ。」

地獄のような場所で・・・

麗（いやだ・・・もうあんなことにはなりたくない・・・
助けて・・・雲雀・・・）

ひつじて、雲雀と麗は六道骸に捕まつた

一方ツナたちは黒曜中の柿本千種と戦つっていた

標的24 六道骸（後書き）

わてこの後麗と雲雀はどちらなのでしょう?

麗が叫んだ理由とは?骸が雲雀に見せたものとは?

（その内容をどう書いたらいいまだに迷っています・・・）

標的25 千種ｖｓ獄寺決着（前書き）

おかげさまでアクセス数10000を突破いたしました～！！

皆様が未熟な私の作品を読んでくださり本当に感謝しています（Ｔ）

標的25 千種 vs 獄寺決着

s.i.d.e 沢田綱吉

獄寺君が黒曜生に狙われて居ると知ったオレは並盛商店街まで来ていた

ついでに、向いの側の通りから爆発音が聞こえてきた

もしかしたら獄寺君が戦っているかもしない・・・急がなきゃ

走つて行つた先にはボロボロになつた建物と座つて居る獄寺君の姿があつた

ツナ「獄寺君、無事でよかつた・・・」

「獄寺」10代田一派の「獄寺」

ツナ「いや・・・獄寺君が黒曜生の奴に狙われて居って噂みたいなのがあつて・・・」

獄寺「そのためにわざわざーーー恐縮つすー今やつつかたといひす」

やつぱりリボーンの行っていたことは本当なんだ

それにも返り討ちつて・・・ほんと強いな

獄寺「その辺・・・！」、いない！――

ツナ「えつ・・・」

獄寺君が差したところは黒い煙が上がっているだけで人影がなかつた

じゃあ、どこに行つたんだ？

千種「手間が省けた」

ツナ・獄寺「・・・！」

そこに立つていたのは全身血まみれの黒曜生だつた

獄寺「まだ生きてやがつたのか。気を付けてください。奴の武器は
ミーミーです！」

ツナ「そんな」と言われても怖くて動けないよ・・・

獄寺「な！？」

千種がヨーヨーを放つ

オレは目を強く閉じてしまった

ツナ「ひいつ！・・・？」

あ、あれ？なんにもない・・・？

目を開けると目の前に獄寺君がいた

獄寺「10代目・・・逃げてください」

ツナ「え・・・！？」

その瞬間獄寺君から大量の血が噴き出して倒れた

ツナ「大丈夫！？獄寺君！？」

千種はヨー ヨーを持つてすぐそばまできていた

千種「壊してから連れていく」

血がポタポタと落ちていっている

どうしようつ・・・」の相手やばいんじゅ・・・

獄寺君は動けそうにないし、オレは何もできないし・・・

千種「早く済ませう」

ヨー ヨーを構える

このままじゃやられる・・・でも足がすくんで動けない

千種がヨー ヨーを投げる

ツナ「うああああ！」

その時何かに引っ張られる感覚がした

気付いたら千種の針は当たっていなかった

いつたい何が・・・

そつ懸つて上を見た。そこによいたのは・・・

山本「滑り込みセーフってことだな」

ツナ「山本ーーー」

結局は学校終わってしまったな

side山本武

獄寺は途中で帰るしつなは来たと思つたらすぐどつか行つちまつた
もんな

それにほんどの生徒が登校してないみたいだしいつたいどうした
んだ?

そんなことを考えながら並盛商店街を歩いてい

最近物騒なせいかいつもより人影が少ない

前から高校生らしい女子2人が來た

女子高生A「また並中生がいる。早くここから離れよう」

女子高生B「そうだね。ほんと物騒だわ」

また並中生がいる・・・!?

この先にも並中生がいるのか

考えていたら少し離れたところで大きな爆発音がした

もしかしたらツナたちがいるかもしれない・・・行ってみよつ

爆発音がしたと思つあたりまで来た

周りの建物はほとんど崩れていて焦げた跡や針みたいなのが地面に刺さつてゐる所がいくつかあつた

こいつは何かあつたな・・・

ツナ「大丈夫！？獄寺君！」

山本「……」の声は・・・ツナ！？

少し先からツナの声がした

オレは走つて声のした先へと向かつた

そこにいたのは倒れている獄寺と突つ立てゝいるツナ、知らない制服を着てゐる男子だつた

男子の手にはヨー ヨーが握られていた

よくわからないがオレの中であいつは危ないと言つて居る

男子が動いた

オレはとつをにツナのほうへと走りスライディングでツナと獄寺を移動させた

ツナ「山本！-！」

山本「滑り込みセーフってとこだな」

さつきまでツナたちがいたところをみると針が何本か刺さつていた

ここに来る途中で見かけた針はあいつの攻撃だつたのか

とつをによけたけどツナは無事みたいだ

獄寺は・・・！-いつたい何があつたんだ！-？

獄寺の体からは大量に血が出ていた

あの見たこともない男子も大量に血が出ていた

ツナ「山本、獄寺君が・・・」

山本「ああ、こいつは穏やかじやねーな」

千種「邪魔だ」

奴の手が動く

おやじくあのゴーゴーから針が出てるんだろ？

ゴーゴーがこっちに向かってくるのなら針が出る前に・・・

スパンッ

切つてしまえばいい

山本の足元には真っ一つになつたゴーゴーが落ちていた

千種「！？」

ツナ「切つたー！つーかいつから山本のバット常備！？」

千種「そつか・・・お前は並盛中学2・A出席番号15番、山本武・

・・・

山本「だつたらなんだ」

ツナ「そつこえは山本、ランキング3位だつた・・・」

千種「お前は犬の獲物・・・もめるのめんぢへきい」

そう言い残して奴は帰つて行つた

ツナ「はつ、獄寺君大丈夫! ! ?」

山本「しつかりしろ! 獄寺! ! !」

この後、獄寺は学校にいたシャマルのところへ連れて行き治療してもらつた

命に別条はないらしいが出血の量が半端なかつたらしい
しまじくは^安静にしておかないといけないそつだ

やめろ六道

あのときの、あの事を私に見せるな

いやだ、思い出したくない。このままでいたい

過去を思い出すと自分が自分がいられなくなる

お願い、もうやめて

やめて、やめて、やめ……て……

獄寺君、無事でよかつた

でも何だらけ。なんかいやな予感がする

この後何か恐ろしいことが起るような……いや、もう起つて
るー

なんでだかよくわからぬけど何か感じる

どじが別の場所で何かが起つてゐるーー

どじょー・・・獄寺君や山本を巻き込むわけにはいかない

そうだ！リボーンに相談しよう

あつとあこつが解決してくれる

このときはまだ知らなかつた。ツナの予感が的中すること
そして、麗の抱え込んでいるものがあまりにも大きすぎる」と

標的25 千種ｖｓ獄寺決着（後書き）

- 明日から中間テストがあるのでテンションの上がらない音無です・・・
- ・
- 今日はほとんじが原作に近い話になってしまった
- 戦闘シーンをうまく表現できなくてわかりづらいうことが多いと思っています
- 改善していくために誰か助言を・・・
- 精一杯努力していくので今後とも「謎の転校生は・・・」をよろしくお願いします（^-^）

標的26 9代目からりの手紙（前書き）

今回ばかりは原作に近くなってしましました・・・

次回からはオリジナルをたくさん入れたいなあ

s.i.d.e 沢田綱吉

いざ、骸退治に出発！！

・・・つて、どうしてこうなるんだ〜

オレは今、黒曜ランドのすぐ前まで来ている

リボーンに聞いた話だと今回の事件の首謀者は六道骸つていう人らしい

骸はイタリアで集団脱獄を行った主犯で、脱獄の際部下を何人か連れて行つた。そして、10日ほど前に黒曜中に転校しあつという間に不良をしめた

オレはてつきりマフィア関係かと思つたけどその逆でマフィアを追放された身だという

で、どうして俺がこんなやばい相手のところに行かなきゃいけないのかとこうと

今から約2時間前のこと・・・

獄寺君のお見舞いに行つた帰り道

ツナ「こんな大変なことになつちやつて…オレビデウナヒチャウの…
！」

オレはこれからどうなことが起こるのかとに不安になつていた

リボーン「ツナ、初めてお前あてに9代目から手紙が来たぞ

ツナ「つな、9代目だつて…！」

9代目からの出が身の内容はいつだつた

親愛なるボンゴレー0代目、君も歴代ボスがしてきたよつに次のステップを踏み出す時が来たよつだ。君にボンゴレの最高責任者とし

て指令を言い渡す。12時間に以内に六道骸以下脱獄集を捕獲。そして捕えられた人質を救出せよ。

9代目

だった

ツナ「ちよつ、何だよこれー!？」

リボーン「追伸。成功した暁にはトマト100年分を送りつ

ツナ「いらねーよー!」

リボーン「ちなみに、断つた場合は裏切りとみなしづつ殺・・・・
わーつ!聞こえない

「聞こえない!」

途中でリボーンの話を遮った

いつたい何なんだよ・・・

こんな危険なことになるなんて

あれ? せつこえんば雲雀さんが黒曜ランダへ行つてからけつこう経つてるよな。なのにまだ帰つてきていふことは・・・本当に相手はやっぱこやつなんじゅー? ?

そんなことを考えながらオレは家へと向かつて歩いていた。そんなとき

「おー、いたいた。オレも連れてってくださいー。」

と、声をかけられた

不思議に思つて振り返つてみるとそこにはいたのはやつともで会つて
いた獄寺君だった

獄寺「今度はメガネヤローの息の根とめますんでーー。」

ツナ「獄寺君ーーつーかケガは大丈夫なのーー？」

獄寺「あんなのかすり傷つすよ」

そんなことを言しながら獄寺君はフリフリだった

絶対に大丈夫なはずがない。無理しちゃいけないのに・・・

獄寺君のことを心配していると向こうのほうから山本が歩いてきた

山本「オレも行べゼンナー。今回の黒曜中のじじはチビに全部聞いた
が。
学校対抗のマフィアージュは？」だつて？」

山本、リボーンにだまされてる・・・

その後、ビアンキも来てリボーンが勝手に話を進めていった

まあ、じつに、いつた流れで今黒曜ランドの前まで来て
るオレは、元気でも何こも出来ないの・・・

僕が目を覚ます飛び知らぬ部屋に1人でいた

雲雀「暗くて何も見えないな。麗、いるのか？」

・・・・・返事がない

「…」とは「」にいなかも「死んでいるか、このどちらかだな

体のあちこちが痛い

あのパイナップルヘアの奴なぜ僕が桜に弱いと知っていたんだ？

それより、僕があの部屋に入ったときには何もなかった。あの桜は
いつあの部屋に運び込まれたんだ？でも、桜がなければたいしたこ
とはない

次あつたときは噛み殺す

それにしても、麗がいないとまんないな・・・

ついでだから麗を助けてあげよう。まあ、生きていたらね

やつと静かになりました

雲雀恭弥。並盛中のケンカの強さランキング1位。たいした程でもなかつたですね

それにしても、ランキングの名前を見たときはまさかとは思いましたがあの雪風麗が並盛にいたとは・・・

一番厄介なのはアルコバレーーーと思つていたのですが雪風のほうが厄介だ

あの“能力”が発動してしまつてはこのぼくでもどうしようもない

昔一度“能力”には世話になつたよ。予想外ではあつたけど結果的に僕の思い通りになつた。いや、それ以上か・・・

あの出来事が雪風にとつてトラウマとなり弱点となつた

その記憶を見せることは僕にとって造作もないことだ。だから今の雪風は僕のおもちゃだ

そろそろボンゴレが一いちにに来るいひでしよう

さあ、これから面白ことが待つてゐる

骸「そろそろ始りますね。あなたの出番はまだですが楽しみにしていますよ」

「…………」

骸は部屋の隅に立っている誰かに話しかけるが反応はない

女だと思われる人物は何もしゃべらず骸のほうへと歩いて行く

日の光が女の顔を照らす

骸「今あなたは僕のおもちゃだ。ほんとうに楽しみですよ。・・・

雪風麗

麗「…………はー」

そこにいたのは先ほどまでもがき苦しんでいた雪風麗の姿だった

わからぬだらう・・・

わかつまで私は何を見ていた?何も思い出せない

だけど何かの悪夢から解放されたっていうことだけはわかる

そうだ、私は六道骸に昔の記憶を見せられていたんだ

でも今はそんなことどうでもいいよと思えてくる

ここは気持ちがいい

何もかも忘れられそうだ。そう、何もかも・・・

標的26 9代目からりの手紙（後書き）

これから麗はやひなつて行くんでしょうかね？

それは少し先になつと思こます

今回も読んでいただきありがとうございました。）

標的27 山本 v s犬

s.i.d eリボーン

今俺たちは黒曜ランドへと来ていた

そこはすでに廃墟となつていてあちこちの金属はさびていた
敷地内に入ることは簡単だ。しかし、敵のアジトとなるとそれ簡単
にはいかねー

山本「んー？何か動物の足跡だな。まだ新しい」

敷地内を歩いていると何かに気付いた山本がしゃがみ込んだ

リボーン「犬か？」

山本「にじゅやあでかすぎるな」

その様子に気づいたみんなが何かの足跡の周りに集まりだす

ビアンキ「爪の部分・・・血よ

ツナ「ひいい・・・」

獄寺「10代目氣を付けてください。何かいる！」

獄寺の一言で皆に緊張感が張りつめられる

どこかの茂みから音がした

獄寺「野球バカ、後ろだ！！」

獄寺が叫んだ瞬間山本の後ろの茂みから黒い犬が飛び出してきた

その犬は山本に向かつて飛び込んでいく

山本「くつ」

山本の目の前まで来ていて止められないと思われた。しかし、次の瞬間犬の口から大量の血が噴き出した

あの犬はすでにやられているものだつた

皆が驚いている間にまた茂みの中から音がして2匹の犬が出てきた

獄寺と山本のほづくと突き進んだが大量の血を噴き出して倒れた

獄寺「ここからもえぐられた死体だ」

ツナ「ひいいいつ・・・いつたい何が起きてるの!?」

ビアンキ「狙われているわ!早くこっちへ」

ビアンキの先導で走り出したツナたち

リボーン「ん?」

何か地面に違和感がある

「かかったびょーん」

どこからか陽気な声がした

すると、近くの建物の陰から人影が現れた

その人影は山本へと飛びかかるがよけられた

よけた際に山本はバランスを崩し地面へと倒れこむ。その地面からはミシミシと音がしていた

山本が不思議に思ったその瞬間地面が砕け下へと落ちて行った
その後を追うように人影も穴へと飛び込んだ

ツナ「何・・・今の?」

獄寺「人影のように見えましたが・・・」

ビアンキ「山本が落ちたわ」

ツナと獄寺は状況が理解できず混乱していたがビアンキは冷静に状況を把握していた

リボーン「ここは動植物園だった場所だな。土砂の下に埋まっちゃつてたんだ」

ツナ「じゃあ、ここ屋根の上へ!! 山本大丈夫! ! ?」

山本「いっつーまいったな。ハハハ・・・」

下はかなり深いようだ

まあ、笑っている余裕があるならたいした怪我はしていないだろ？

ツナ「山本つ……右に向かうるー」

山本「……」

ツナの奴、最近鋭くなってきたな

山本を追つて下に落つたやつ、あの動きはかなり素早い

どひづる、山本武

side 山本武

ツナ「山本氣を付けて！陰に何かいるー。」

うーん。どーすつかな

確かに何か飛んできてよけたらこの穴に落ちたんだけどあれはいったい何なんだつたんだろう？

「歓迎すんよ、山本武」

山本「ーーー」

陰の中から声がした

その方向を見てみると人がいた

それは、連續暴行事件の一昧の城島犬だつた。しかし山本たちは犬

の正体を知らない

犬「柿ピー寝たままでさー、命令ねーし、やることねーし超暇だつたの。

そこへわざわざオレの獲物がいらっしゃったんだもんな。超ハッピー！」

獄寺「黒曜の制服！－！」

犬「上の人たちは首を洗つて待つてねー。順番に殺つたげるから」

まるでゲームを始める子供のように軽く言つ

犬「それじゃ・・・よーい、ドン！」

この合図と同時にかけだす犬

そのまま山本へと向かっていくが山本はギリギリのところから右へとかわす

かわされた犬はそのまま勢いを利用して壁を蹴り回転しながら高く飛んだ

ツナ「な、何あれ！？」

獄寺「人間技じゃねー！」

その様子を見ていたツナと獄寺が叫ぶ

犬は壁から壁へと移りまた山本へと突っ込んでいく

山本は持っていたバットを出しガードするが噛み碎かれた

犬「ヒヤツホーウ！次は喉をえぐるぴょん」

そう言いながら噛み碎いたバットの欠片を口から出す

山本「フー。なるほどな。マフィアごつこつてのは加減せずに相手をぶつ倒していいんだな。そういうルールな」

ツナ「怖がるどいか山本の顔つきが変わった・・・」

リボーン「あいつ、あー見えて負けん気つえーからな。

バットを折られて心中穏やかじゃねーぞ」

犬「お前には暗くてよく見えねーかもしんないけど、オレにはお前の位置が

よくわかるぴょん。だつてオレにはお前にべつとりつけた犬の血のにおいが

ブンブン臭つてくるんだよーーん」

言い終わると同時に山本の前に鋭い爪が振り落とされる

刀を折られて武器のない山本はよけてばかりだ

犬「よけてばかりでつまんないから上の人から殺っちゃおーかなー」

といつた瞬間犬の後頭部に小さな石が当たった

犬「んあ?」

山本「お前の相手は俺だろ?」によ。ここつぶち当てゲームセットだ

そういつた山本の手には小石が一つ握られていた

犬「ほへー挑戦状だ。んじゃオレも本気だそつかな」

かけだした犬は今までとは比べ物にならないぐらい速かつた

山本は小石を投げたがはずれた

犬「いたらき……」

山本の左腕にかみつく犬

腕がメキメキとなりながら血を噴き出す

山本の負けかと思われたそのとき

山本「お互い様だぜ……」

そう言って刀の柄で犬の頭を強く殴る

犬は叫び氣絶した

獄寺「あいつはなつから腕一本くれてやるつもりで……」

山本「終わった」。ツナ、引き上げてくんねーか?」

ツナ「え、分かつた」

犬を倒した山本はツナたちによつて穴から引き上げられた
幸い山本の腕はたいした怪我ではなかつた（メキメキついてたけ
ど・・・）

ツナ「山本、野球の大会近いのに・・・本当に」めん

山本「よしてくれよ。たいした怪我じやなかつたし」

それに、昔は野球が一番だつたけど今はダチためならなんだつてや
るさ

リボーン「そんじや、そつぞと先に進むぞ」

sideフウ太

犬との戦いをフウ太は近くの茂みから見ていた

ごめんねツナ兄・・・

ごめんねみんな・・・

もう、みんなのところには戻れない

骸さんについて行くことにしたよ・・・やよつなら

標的27 山本v.s犬（後書き）

一つ問題が解決したと思つたらまた問題が発生・・・

文化祭が近く実行委員をすることになった音無はそんな状況でツナたちみたいに大忙しです

さて、流れのほとんどが原作通りになつていなすが「つまんない」と思つてゐる読者の監督さま、これからが音無の“オリジナル”がたくさん入ってきます

おわりく、M・Mやバーズの戦闘シーンは省かれると思ひますので“了承ください”

標的28 疑問と不安（前書き）

最近テスト勉強をしようと親にひりひりと言われ仕方なくやっている音無です

（泣き言ひつてたらリボーンに何か言われそーだなー・・・）

読者の方がだんだん増えてきてとても嬉しく思います！！

未熟者の作品を読んでくださる皆様に感謝の気持ちでいっぱいです
(^-^)

sideリボーン

ここにはヤベーな

俺たちは今危機的状況にある

目の前には写真で確認した六道骸が立っていた

その横には体から血を流して倒れている山本の姿があつた
オレたちはあの後、しばらく黒曜ランドを歩いていた。そこにいき
なり六道骸が現れた

ディーノから情報と写真をもらい相手の顔と名前は知っていたがこ
こで現れるとは思つてもいなかつた

獄寺がトライデント・モスキートの副作用で動けないため山本が相
手をしていたが全く歯が立たなかつた

ツナはびびつて動けなくなつていて。今ここであれを使つしかねーか

リボーン「暴れてこい。ラスト一発だ」

最後の死ぬ気弾をツナに撃つた

ツナ「復活！」六道骸、死ぬ氣で倒す！
死ぬ氣になつたツナは六道骸に向かつていつた

side 沢田綱吉

ツナ「ハア、ハア・・・」

六道骸・・・強い

死ぬ気になったオレは六道骸へと向かっていった

鋼球による攻撃を全て止め、六道骸にダメージを与えることができた

しかし、六道骸は肉弾戦が強かつた

攻撃に回れず防御ばかりが続く

だけどオレは何か違和感をかんじた

六道骸からは悪意を感じられなかつた。むしろ罪悪感を感じる
もしかしたらあの人は六道骸ではないのではないかとさえ思つた

ツナ「あんたはそんなに悪い人じゃない」

そんなことを言つていた

六道骸「黙れ小童！！お前にオレの何が分かる！！」

そつ言つて拳を振りかざすがツナの腹へのパンチにより膝をつく

六道骸は口から血を吐きだした。もう立てる体力はなかつた

六道骸「オレが・・・ま・けた・・・」

負けたのが信じられないという顔をしている

ツナ「攻撃するとき必ず目を閉じるのも鋼球を使わなくてはとどめをさせないのも

あなたの心に罪悪感・・・迷いがあるからだ」

ツナの死ぬ氣モードが解けていく

ツナ「最初に見たときからおかしいとは思っていたんだ。とてもあつたかくて怖い感じがしなかつた」

六道骸（じごつ、一見にして俺を見抜いたというのか・・・）

ツナ「あなたは本当の六道骸ではないのでは?」

六道骸「!」

ツナ「何か理由があつてこんなことをしてるんでしょう?
あなたが自分の意思でやつたとは思えない」

六道骸「・・・オレは・・・六道骸ではない。あいつにオレは利用されてきた。

何度も逃げようと思つたがオレは世間では罪人として扱わ
れているから
逃げる場所がなかつた。気を付けるボンゴレ。あいつの目
的は・・・

ツナ・リボーン「！！」

目の前の人の中から大量の血が噴き出した

何が起つたのか分からぬ。一瞬だつた

何かが横切つたような気がした。その瞬間に血が噴き出してきた

リボーン「口封じのために誰かが斬つたな。そこに隠れてないで出
てこい」

近くの木に向かって話しかける

その木の後ろには人影があつた

獄寺「10代目下がつてください」

ツナ「獄寺君！…もつ大丈夫なの！…？」

ビアンキ（副作用がひいたのね）

「ふふふ」

木の後ろから笑い声がしてきた

獄寺「てめー隠れてないで出てきやがれ」

ダイナマイトを投げつける

爆発と同時に人影が表に出てきた

そこにいたのは・・・

獄寺「っな！おまえは！…」

ビアンキ「なぜあなたが！…？」

リボーン「！…」

ツナ「え！？ なんで……？ 雪風さん、どうしてここにいるの？」

並盛中2 - A 雪風麗だつた

リボーン「麗！ いつたい何があった？」

麗「……」

「こんなに驚いているリボーン初めて見た

いつたい雪風さん何があつたんだろう

ビアンキ「麗、あんたがこの人を殺したの？」

麗「殺してはいない」

ツナ「よかつた雪風さんがやたんじゃなかつたんだ」

麗「ただ、しゃべれない程度に傷を負わせただけ」

ツナ「……何で雪風さんが」「んな」とき……」

リボーン「……マイイングロントロール」

ぼそつと呟いた

オレ達は何が何だか分からぬ状態でいた

しばらく静寂が続く。最初に口を開いたのは麗だった

麗「本物の六道骸に会いたければ向こうに見える黒曜センターに来い。

そこで六道骸はお前たちの知つてゐる人物と待つてゐる」

獄寺「何でそんなことをお前が言つんだ?」

麗「これから、楽しいゲームが始まる」

そつこつて雪風さんは黒曜センターの方へと去つていった

まるで風のように速かった

状況を把握できていない俺たちは何をしていいのか分からなかつた

「……」

偽物の六道骸が弱々しくなる

ジアンキ「意識がまだあるわ」

ツナ「大丈夫ですか！？」えっと……そうだあなたの名前、六道骸
ではない

本当の名前があるのでしょ？」

偽骸「……オレの名は……ランチア。さっきいた雪風と六道骸
には気を付ける……。

あいつらは昔から……とんでもないやつらだつ……た……

「

ランチアはそこで気を失った

ツナ「そんな……ランチアさん、しつかり……」

獄寺「不要になつたとたんこれかよ。しかしなんで雪風が……
それに、最後のランチアさんが行つていた言葉が気になる。
まるで雪風と六道骸が昔からの知り合いみたいじゃねーか

獄寺の言葉でみんなの表情が暗くなる

ツナ「でも・・・雪風さんはそんなことをするような人じゃない。
確かにちょっと怖いところもあるけど本当は優しい人だよ、
きっと。

過去に何があったかは知らないけどオレは雪風さんを信じて
るー。」

リボーン「ツナ・・・(囁き声になつたじやねーか)」

獄寺「10代田・・・」

ビアンキ「うじうじしても仕方ないでしょ。山本も治療したしさ
つせと行くわー」

そういうたビアンキの隣には少しフラフラしているが元気な山本が
いた

山本「事情はビアンキから聞いたぜ。ツナの言つとおり俺達も信じ
よー。」

獄寺「野球バカに言われるのはしゃくだが・・・信じてやるよ

リボーン「そんじや、いへど

六道骸のやり方はひどすぎる。あいつだけは絶対に何とかしないと
!!

こうして俺たちは少しの不安を抱えながらも六道骸のアジトへと向
かうことになった

骸「おかえり、麗。クフフ、無事元気でしたみたいですね」

麗「……」

私は何をしているんだろう

思考がつまづく回らない。体が言つことを聞かない

マイコンピューターロールとはまた違う感覚がする

私はいつたい何者……？

だんだん、意識が遠のいてくる

骸「麗、あなたにはまだまだ働いてもらわないと困りますよ」

麗「…………」

誰も見ていない中、静かに不気味に笑った

標的28 疑問と不安（後書き）

さてさて、麗の秘密が徐々に暴かれていきますよ

骸と麗との関係はいかに・・・・！

いま、いくつかのパターンが頭をよぎってどのパターンで行こうか迷っています・・・

標的29 マインドコントロール

s i d e 獄寺隼人

獄寺「いよいよっスね」

オレ達は黒曜センターの入口まで来ていた

10代目とランチアさんの戦いが終わり雪風があらわれた

雪風は六道骸にコントロールされているのだろうとリボーンさんは言つていたけど、一般人にしてはあの殺氣はただものじゃなかつた

雪風麗・・・転校してきたときから何か違和感はあつたんだ

名前は聞いたことがないからマフィア関係ではないのだろう

ツナ「ここに六道骸がいるのか・・・緊張してきた」

山本「大丈夫だつて。麗の奴もきっと待つてゐるぜ」

ビアンキ「そりいえば、麗の言つていた私たちの知つてゐる人って誰かしら?」

やつこえさせうだぜ・・・

それに最後の残したあの言葉

『これから楽しいゲームが始まる』

「いつたこどりこつ意味なんだ?」これから何が起きてるか一々だよ

リボーン「先に進むぞ」

リボーンさんの声を畠岡に聞かせました

中はかなりボロボロだった

あひこがれきがあつたし窓ガラスはほとんど割れている

オレ達は少し歩いた。そこで姉貴が何かに気付いた

ビアンキ「おかしい・・・階段がないわ」

リボーン「壊されてるみて だな。だが、必ず一つはあるはずだ」

シナ「どうこいつ?」

リボーン「こちらの移動ルートを絞つた方が守りやすいだろ？」

逆にいえば自分の退路を断つたんだ。勝つ気満々で「
とだな」

そうこいつとか・・・なめられたもんだな

ん？足に何かが当たった

下を見てみると壊れたケータイだった。しかも雲雀恭弥つづーやつ
のだ

ツナ「獄寺君、そのケータイって雲雀さんの？」

獄寺「みたいつスね」

山本「なあ、知つてたか？雲雀さんの着つた、うちの校歌なんだぜ」

獄寺「なあー？ダッセー！」

まじかよ。どんだけ雲雀の奴並盛に愛着持つてんだよ

ツナ「あーーーあつひに非常階段があつたよー！」

獄寺「さすがは10代田！」

リボーン「いくぞ」

階段へと向かつて歩きだしたときだつた

シユルルル

聞き覚えのある音がした

あの音は確か・・・柿本千種つつーやつのはーはーの音じやねーか

獄寺「どこ隠れてやがるー出てきやがれー！」

ツナ「えー！もう敵が来たのー？」

千種「めんどうせーこー・・・早く済ませよー」

曲り角から出てきた千種は独り言のよつて言つた

ツナ「で・・・出た！黒曜生・・・」

獄寺「10代目たちは先に行つてください。」
「はオレが食ことめ
ます」

ビアンキ「隼人聞いて。あなたは前にやられたときシャマルのトライ
イデント・モスキート

のおかげで命を取り留めたの。そのためまた激痛をとも
なう発作が起きるわ。

それでもやる気?」

獄寺「あたりめーだ。そのためにオレはこーる」

何を言われようがオレの決意は変わらぬ

だが、よりによつてあいつに助けられるとは・・・

しかし、副作用とは厄介だ。いつ起きるかわからぬ

せめてこの戦いが終わるまで持てばいいんだが

ツナ「獄寺君・・・」

ビアンキ「行きましょう、ツナ」

よし、10代田たちは無事行つたな

それにしてもおとなしく行かせてくれたじやねーか

何か企んでいるのか？

それとも、この先行かせても俺たちは勝ち目がないとでも思つて
んのか

まあ、どうひいてもオレは勝つーー！

獄寺君を置いて行つちゃつたけど大丈夫かな

確かに獄寺君は強いけどやつぱり心配だよ

ビアンキ「ツナ、隼人は大丈夫よ」

山本「そうだぜ。ぜつて一大丈夫だつて」

ツナ「ビアンキ・・・山本・・・」

そうだよね。オレたちが信じてあげないといけないんだよね

獄寺君はきっと大丈夫。オレは前に進まなきや

そう思つていたとき、近くに3階へと続く階段を見つけた

オレたちはそこをのぼつて行つた。また敵が現れるかもしれないと思つたけど今回はいなかつた

その変わりそこにいたのはフウ太と本物の六道骸だった

ビアンキ「フウ太、そこは危ないから下がつてなさい」

そう言いながらフウ太へと近づいていく

おとなしい「ビアンキ」に従つと思つたそのときだつた

「ビアンキ……ふう……た……」

ツナ「ビアンキ!!」

フウ太の隠し持つていた剣がビアンキのおなかに刺さつていた

山本「いつたいてうしちまつたんだよーー?」

皆が驚きをかくせないでいる

その中でフウ太の近くにいた六道骸だけが笑つていた

ビアンキはおなかに剣をさしたまま倒れる

フウ太はビアンキから剣を抜きオレめがけて走つてきた。そのまま剣を振りかざす

とつむに体をそらす。剣はオレの目の前の空を切つた

ツナ「フウ太、どうしたんだよ。そんな物騒なもんしまえよ!」

フウ太「ううう……」

フウ太……まさか

リボーン「マインドコントロールされているみてーだな」

やつぱり……

フウ太のあの目、ランチアさんの目と似ていた

きつと自分のしたことに罪悪感を感じてるんだろうな

でも心配することはないよ。何があってもフウ太はフウ太だ

再びフウ太が剣をツナに向かつて振りかざそうとする

ツナ「おまえは悪くないぞ。全然おまえは悪くないんだ」

フウ太「ううう……」

フウ太の動きが止まる

ツナ「みんなフウ太の見方だぞ。安心して帰つてこいよ」

フウ太「ううう……」

フウ太の顔が苦痛で歪む

骸（マインドコントロールを解く『一番望むこと』を言い当てたか・
・・）

フウ太「・・・ツナ兄」

ドサツ

正氣に戻つてフウ太は最後にツナの名前を呼び氣を失つた

倒れたフウ太から口や鼻、耳からも血が出てくる

ツナ「おいつ！フウ太！？」

ビッシュ・・・

血が止まらない。速く手当てしなきゃ

骸「君が余計なことをするから彼、クラッシュしちゃつたみたいですね」

ツナ「そんなー。」

骸「彼は本当に手のかかる子でしたよ。ボンゴレーの代田と顔見知りと噂のフウ太君に

来てもらつたのですが“沈黙の撃^{オルメタ}”を貫き通しだんまりでしきねえ。

やうには、心を闇^{ヤマ}としてランキング能力まで失つてしまつた

ツナ「なんだつてーーー？」

リボーン「それで仕方なく以前に作られた並盛のケンカランキングを使い

ツナとファミリーをあぶりだそうとしたんだな」

骸「さすがはアル「バレーノ。もぐろみ通り今ここにボンゴレはいる」

ツナ「いつたい人を何だと思っているんだよーーー！」

その間に骸は当たり前のよつにいつ眞ひた

骸「おもちゃ……ですかね」

なんてやつだ

本当に自分のことしか考えていない

人をおもちゃ扱いするなんて絶対に許さない

どこから闘争心がわいてきているのかは分からぬけど、『オレは六道骸に勝たなくちやいけない』 そう感じた

山本「ツナ、ここはオレに任してくんねーか?」

ツナ「山本……?」

いきなり山本が言つてきた

ダメだと眞あつと思つたけど山本の口を見たらそんなことば言へなかつた

山本の口は本氣だった

本氣で怒つていた

ツナ「無茶はしないで・・・」

「ううしかなかつた

山本「やべやめー」

山本がバットを振り剣へと変える

骸「ほほつ・・・そのバットは面白いですね。いいでしょ。相手してあげますよ。

しかし、私ではないですが」

山本「ここにはあんた以外黒曜生はいない!」

たしかにそうだ

ここには六道骸以外の黒曜生の姿は見えない

なんだか嫌な予感がしてきた

骸「確かに黒曜生はいませんね。黒曜生は・・・」

山本「どうこいつだ？」

骸「クフフ。出でなさい……麗

山本「……」

ツナ「……」

リボーン「……」

骸の指示と同時に骸の後ろにあつたドアから麗が出てきた

骸「麗、この子たちの相手をしてあげなさい

笑いながら麗に指示を出す

麗「分かりました。骸様」

無表情でそういった麗は俺たちに向かって歩きだした

麗の日は感情が全くないような冷たい日をしていた

標的29 マイナンコロナロール（後輩）

やつといじりまで来ました

次からは戦闘がメインになつてくると思います

私の文章力じゃ分かりにくいうのが多々あると思いますが、少しみごん承
ください
(どなたか私に知恵と技術を下さってください・・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9829s/>

謎の転校生は・・・・

2011年11月17日19時12分発行